どうも、花開院と申すものです

胡蝶夢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
どうも、花開院と申すものです

【Ｎコード】
Ｎ１７７３Ｖ

【作者名】
胡蝶夢

【あらすじ】
陰陽師の掟？・・・・・そんなん知らんがな。俺は俺のやりたいように生きて行く。
――――――――そんな陰陽師のごくありふれたものがたり。

零話　江戸の町　聞いて極楽　来て地獄（前書き）

言うなればプロローグ

零話　江戸の町　聞いて極楽　来て地獄

町を歩く二人の学生。
片方は黒髪でぼさぼさ頭の少年。着崩した学生服が、いかにもだらしなさそうな雰囲気を醸し出している。
もう片方は磨きぬかれた剣の様な綺麗な銀髪をした少女。凛とした姿から、しっかりとした雰囲気を醸し出している。
性格的にも、外見的にも対照的（モノトーン）な二人。

「酷く存外な紹介をされた気がするんだが・・・・。こう・・・・世界の意思的な物に」

歩みを止めず少年、花開院（けいかいん）早雲（そううん）は言う。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。」

一切の言葉を発さない少女、花開院（けいかいん）皐（さつき）。
別に彼女が喋る事の出来ない状況とか、無愛想という言う訳ではなく、単なる無視である。

「なあ、何でそんなに不機嫌なの？俺なんかやったか？」

皐はあまり、早雲の事を快く思っていない。
生活のだらしなさ、修行の不真面目さ、そして何より陰陽師としての自覚が全く足りていない。
”本家”の陰陽師である『竜二』もこれには当てはまるが、彼にはそれ相応の才能と実績がある。

だが、早雲にはそれが無い。それに加え妖怪を幾度も逃がしている間抜けさ。自覚足る陰陽師の一人として、彼の存在はどうにも気に入らなかった。

「・・・・・着いたわよ。浮世絵中学」

早雲の問いには答えない。答えたとして、早雲が変わるとは思えない。
それに、パートナーとなったのだから、これから何かと付き合いもあるだろう。関係の悪化は阻止したい。

「ん。ああ、着いたな。・・・・ゆらは元気してっかねぇ」

浮世絵中学校。
これから彼らの通う中学で、その第三学年にあたる。
同じ花開院の名前を持つ彼らの義妹(いもうと)も、この学校に通っている。

「・・・・さあね。会えばわかるでしょ」

「そりゃそうだけどよ。なんかもっとこう言い様があるだろ」

「――――ほら、入るわよ」

◇　◇　◇

Ｓｉｄｅ　早雲

俺のクラスは三組。良くか悪くか皐とは別のクラスとなった。組織的には連絡の簡易さから考えて、同クラスである方が何かと都合がいい。

だがまあ、皐には嫌われている気しかしないので、バラバラになって個人的には助かった。京都からこちらへの移動時間中、なんとか仲良くなろうといろいろ画策したのだが、結果この様である。

・・・・きっとこのわだかまりは時間が解決してくれる筈だ。そう信じよう

「京都からこちらに転校してきた花開院早雲だ。同姓の親戚が別クラスに居るから、早雲って呼んでくれ。・・・・以後よろしく」

「早雲くんはそこの席だから、そこを使ってね」

「わかりました」

わりと普通な自己紹介をした後、担任教師に席を教えてもらい席に着く。
転校生がくる事になって後付けで用意した席なのだろう。俺の席は窓際の一番後ろという夏は涼しく冬は暖かい、立地条件がばっちりの席になった。

「――――――じゃあ、授業を始めるわよー」

さて、授業一（理科）も始まった事だし、真面目な話をするとしよう。
どういう訳か、浮世絵中学校には結構な数『妖怪』が居るみたいだ。
数はわからない。
ただわかる事は、『とんでもない化け物』が一匹いるってことだな。

「平和な町じゃねえのかよ・・・・・・・」

江戸は”妖怪関連で”平和な町だと本家の奴は言っていた。半人前の陰陽師が修行に行くには丁度いい地だとも。
どう考えてもこの『とんでもないの』は半人前の奴が手に負える相手ではない。少なく見積もっても、一人前の陰陽師が十数人でかかって勝てるか。だ

あの野郎・・・・めちゃくちゃ情報誤ってんじゃねえか、おい。
くそっ・・・・陰陽師って奴ァ信用ならねえ・・・。嘘つきばっかりだ・・・・。

ゆらはどうか知らないが、さっきの様子から察するに、幸運にも皐の方はこの妖怪には気付いていない。
精々、『妖怪が居るような気がする』と思っている程度だろう。まあ、そこは安心だ。
あいつの性格からして存在を察知したら『悪即滅』だからな。勝てる勝てないも考えずに戦闘になるだろう。

この妖気からは今すぐ事を構えようという気は感じられない。ここは様子見を・・・・いや、会ってみるか。その方が手っ取り早い。

◇　◇　◇

「――――――という訳で、・・・・・よう」

放課。屋上。
妖気の発信源を探った結果、発している本人を見つけるに至る。ちょうど一人のという事もあり、話かける事にした。
見た目は黒髪のオールバック。学ランのボタンが全開のいかにもな不良だ。あと特徴的な点は、大きな髑髏の首飾りしている事ぐらい

かね。

「・・・・・誰か知らねぇが何か用か？」

胡散臭そうな目をする妖怪。
まあ、見ず知らずの奴が馴れ馴れしく話し掛けて来たんだ。普通は警戒する。

「特に用があった訳ではないよ。『ふと思いついて』屋上に来たら先客がいたからね。話しかけただけだ」

「そうか。」

不自然の無いように偽り、答える。
そんな嘘が功を奏し、妖怪は警戒を解いてくれたようだ。

「ところで、名前なんて言うんだ？」

「倉田だ。そう言うおめぇは？」

この妖怪は『倉田』と言うらしい。
あくまでこれは『人間の時』の名前で、本名は別にあるんだろうが

な。

「早雲と呼んでくれ」

一応、余計な争いは避けるため花開院の名前は伏せておいた。
相手がこちらの事を知っているかはわからないが、念には念をと言う言葉もある。

その放課中、その妖怪と話した―（一方的に話しかけた）。俺の見た限りでは倉田はわりと友好的な妖怪のように思われる。
見た目はアレだが、本人からは穏やかな雰囲気が漂っていたし。きっと俗に言う『善い妖怪』って奴だな。

『倉田』は念の為警戒はしておくとして、それ以上の処置は必要ないだろう。
とりあえず、当面の問題はこれで解決だな。

零話　江戸の町　聞いて極楽　来て地獄（後書き）

Ｔｉｐｓ

”本家”

花開院家は『本家』と『分家』で別れており、花開院家の開祖である『蘆屋（あしや）　道満（どうまん）』の血を引いている人間が本家、それ以外は分家の人間とされている。

本家と分家は、それほど扱いに差は無いが、本家の人間には狐による呪いがかけられており、『本家の男子は必ず早世する』と言う事態になっている為、本家と分家は分家の方が良かったりする。

その呪いによって、ほんの数年前までは『正真正銘』の本家の男子は数名いたが、現在は二人にまで激減している。

一話　幸い転じて厄となす（前書き）

閲覧ありがとうございます！

一話　幸い転じて厄となす

『――――――私、きれい？』

Ｓｉｄｅ　早雲

「・・・・連絡はこれぐらいかしら。――――――皆、気を付けて帰ってね。寄り道とかしちゃダメよ」

特にこれと言って問題は無く、帰りのＨＲが終わる。

挨拶が終わってすぐ、全ての生徒が漏れなく帰路についている。

連絡で言っていたが、最近ここら辺で通り魔事件が多発しているらしい。この学校にはその通り魔に危害を加えられた人もいるそうだ。なんでも、その通り魔が出没するのは大体夕暮れ時。ようするに、部活や居残り等の生徒が帰りの時に襲われる訳だ。よって、学校は部活と居残りをその通り魔事件が何らかの形で解決されるまで、一時的禁止を行っているらしい。

まあ転校してきたばかりで、何の部活にも入っていない俺には関係の無い事だ。さっさと帰ろう。

「さてと・・・・帰りますかね。新居に」

俺達はここに派遣につき、本家から住居を宛がわれている。高級・・・・ではないが、新築で綺麗なマンションの一室だ。
ちょっと不満があるとすれば、一人暮らし向けマンションなのに、そこで三人暮らしする破目になってる事だな。

理由はいろいろあるが、一番主だった理由は、花開院家そのものに金が無いからだ。
我が花開院家のメイン業である『妖怪退治』と言うのは所謂『ボランティア』で行うもので、多くは収入が得られない。
得られたとしても雀の涙程で、花開院と言う大組織を動かすには全くもって足りない。

――――――では、どうやって生計を立てているのか？

何も、陰陽術と言うのは妖怪退治にしか使えない訳ではない。
手品のタネとして使えば一般人には到底辿り着けない域の手品が出来るし、式を使った探偵業や日雇い労働。本場の占術を使って占い師をやってみたりとか。
結構様々な所に活躍の場があるので、そういった場で収入を得ていたりする。

まあ、それでも足りていないんだがな。

今回住む事になるこのマンションの一室だって、最初は訳あり物件

で、『出る』という理由から家賃が格安だった。
・・・・・今はその原因に退場してもらって出る事は無いけど。

要するに、所々で切り詰めて行かないと回らないほどうちは金欠なのだ。

「あー、夕食の食材は買って行った方がいいな」

◇　◇　◇

学校の近所のスーパー。
通り魔の事もあってか、スーパーが混む時間帯である夕刻前であると言うのに、閑散と静まり返っている。

「・・・・・・・・これ位でいいか」

適当に籠の中へ出来合いの料理や食材を詰め込み、レジへ持っていく。

通り魔事件で客が減っている中、客足を繋ぎとめる為か、商品は基本的に格安だった。コレ売れても元取れるのかってぐらいに。

「ありがとうございましたー」

会計を済まして、定員の挨拶に送られながら、スーパーを出る。

両手に膨れ上がったレジ袋。・・・・安売りに中てられて少し買いすぎたか。

まんまとスーパーの企みに嵌められたようだ。

「――――――あ、早雲義兄(にい)ちゃん。ここにおったんか」

黙々と帰路を辿っていると、見知った顔に遭遇する。

「おう、ゆら。久しぶりだな。お前、しばらく見ない間に随分大きくなったなあ・・・・・」

彼女の名は花開院ゆら。

本家の陰陽師にして、現生陰陽師の中で唯一『破軍』を扱える天才だ。

その才能に驕ることなく努力を惜しまない。今の花開院の期待の星と言ったところか。

花開院家の金欠が影響してか、少し意地汚いのが玉に瑕だがな。

「いやいやいや、先月”屋敷”で会ったばっかりやろ。そんな短期間で見違えるほど成長しとらんわ！」

「そういえば、そうだったな」

言われてみればそうだった。先月会ったばかりだ。

「・・・・・・・そんな事より、皐義姉(ねえ)さんが探してとったで」

「俺を？皐がか。珍しい事もあるもんだな」

昼間の非礼でも詫びる気になったのだろうか。

・・・・・いや、それは無いか。

今まで深い親交があった訳ではないので確証は無いが、あいつはきっと頑固だ。

「何でも、最近の通り魔事件が――――――――――っ！」

「・・・・・・・どうした？」

良い所で話を切るゆら。
あまりにその切り方が不自然で、ゆらに尋ねる。

「早雲義兄(にい)、妖気やっ！」

「えっ？――――ちょっ、おい、置いてくなっ！」

妖気を察知したらしいゆらは、妖気が発せられた方へ駆けて行く。
俺を置いて。

昼間の妖怪の事もあり、追いかけたいが、両手に買い物袋がある。
卵も買ったし割れたら大変だ。

「・・・・・・仕方ないか」

幸い、俺の歩く街道には人が居ない。
この場でどんな超常的な事が起ころうと、それを人に知られる事は無いだろう。

「出でよ我が式神、”五鬼”！」

言いながら”式符”を投げる。
瞬間、現れたのは五鬼の名の通り、五匹の鬼。身の丈は１７０弱ある俺の半分程。９０ぐらいで、わりと小さい。

「われら五鬼、只今参上した」

一番前に出て来た、赤い鬼が言う。

「・・・・これを家に届けてくれ。あと、誰にも見られんようにな」

両手に持っていた買い物袋を差し出す。

体が小さいので、運べないのではないかと心配になるが、こいつ等は鬼。
人間より遥に力を持っていたりする。よって、その点は心配ない。

「承知した。その命（めい）、命に代えてでも」

命に代える程の仕事ではないと思うが・・・・・。
つっこんだら負けか。

「じゃあ、頼んだぞ！あ、卵割るなよ」

荷物は鬼たちに任せ、ゆらを追う。
追うと言っても、ゆらが最初に曲がった時点で俺の死角に入ったため、勘で進む事になるが。

・・・・・・・・・・・・・・

「ちっ、どっちだよ・・・・・」

・・・・・・思っていたより、かなり難儀している。
『普通の陰陽師が気付ける位の妖気』が発せられたと言う事は、妖怪が人を襲おうとしていたと言う事になる。
だから、『妖怪が人を襲いそうな所』を探せばいいと楽観していたが、迂闊だった。

この街の多くの街道は通り魔事件の影響で人通りが極端に少なくなっている。
要するにこの街そのものが『妖怪が人を襲いそうな所』なのだ。
妖気で探ろうにも、俺の探知能力は『普通』を遥に超えていて、昼間の様に妖怪が妖気を隠して人間化している状態でも、ばっちり探知出来てしまうのだ。

結果、俺は町中の妖怪の妖気を探知出来ているが、ゆらが探知した妖気がどれなのかわからないという事態を生んでしまっている。

「あのっ！！そこの人っ！！」

「・・・・・うん？なんだ」

俺を見つけ、こちらに駆け寄ってくる少女。
息を切らし、大慌て。只ならぬ様子だ。

髪は栗色をしている少女。歳はゆらと同じ位だろう。
着ている学生服を見たところ、俺と同じ浮世絵中学に通う生徒のようだ。

「友達がっ、友達が襲われてる所を助けてくれて、そしたら、突然倒れちゃって。――――――私、何も出来なくてっ」

涙ながらの懸命な説明。

相当慌てているらしく、要領を得ないが、なんとなくは伝わった。
要するに、その友達が危ないってことだな

「・・・・・・・・・案内してくれ」

「はいっ！」

◇

◇

◇

案内された先にはゆらが倒れていた。
状況から察するに、妖怪にやられたと見て間違いないだろう。

一話　幸い転じて厄となす（後書き）

Ｔｉｐｓ

”屋敷”

花開院の最重要拠点で、重要な行事などはここで行われる。
また、京都在住の多くの陰陽師がここで暮らす為、数多の術を施しており、それによって、『外観より圧倒的に広い内部』という不思議現象を生んでいたりする。

”五鬼”

早雲の式神の一つ。
史実では『前鬼』と『後鬼』の子供とされている。
五匹をワンセットで普通の式神一匹分の霊力消費で呼び出せる便利な式神。
見た目に反し実は鬼の中で、なかなか上のランクに位置している。
―（グーパンでビルが倒壊するレベル）
形状は全くもって同じだが、それぞれ、赤、青、緑、黄、紫　と別々の色をしており、順に火鉢（ひばち）、湯呑（ゆのみ）、胡瓜（きゅうり）、沢庵（たくあん）、干瓢（かんぴょう）という名前がある。命名　早雲

”式符”

式神を入れておく紙。難しい言葉が沢山書いてある。

二話　町を歩けば棒に当たる（前書き）

閲覧ありがとうございます！

二話　町を歩けば棒に当たる

夜刻、自宅マンション。
倒れていたゆらを運び込んで、今隣の部屋で皐が診ている。
”治療術”の扱えない俺は部屋に居ても邪魔なだけなので、隣の部屋で診察の終わりを待っている。

この場には俺以外もいる。ゆらの元に俺を案内してくれた少女だ。
名前は『家長カナ』と言うらしく、ゆらと同じクラブに所属しているそうだ。

さっき改めて話を聞いたところ、妖怪に襲われている所にゆらが駆け付け、その妖怪を撃退した所であいつは倒れたらしい。
最後っ屁にやられたと言ったところか。

ガチャッ

ドアを開け、皐が出てくる。診察が終わったようだ。

「あの、ゆらちゃんは・・・・？」

駆け寄る家長さん。自分のせいでこうなったと思っているのか、表情が深刻だ。

「かなり危険な状況よ。・・・・・四日持てば御の字かしら」

陰陽師の治療術は大分発展している。
妖怪につけられた傷なら、即死級の致命傷でも無い限り、ほぼ治せる程に。

だが、例外はある。

「”呪い”か」

『呪術』

対象を外的損傷以外で苦しめ、最終的に死に至らしめる術の総称。
外的損傷が無い以上、治療術が効かないため、妖怪の攻撃の中で最も厄介とされている。

一応『解呪術』なんて言う呪術の対抗術もあるが、呪術自体がどういう原理で働いているのか不明なため、ほぼ全ての陰陽師は扱えない。
数少ない扱える陰陽師もその威力は微々たるもので、下の下ぐらいの妖怪の呪いを打ち消すので精一杯だ。
１０００年弱続いている花開院家の記録を見ても、『解呪術』の成功例は数件。それほど呪いの解呪は難しいのだ。

だが、ゆらは助からないと言う訳ではない。
呪いを解呪する事は無理でも、消滅させる事は出来る。・・・・・・

術者を滅しさえすれば。

「恐らく・・・・ね。私は解呪術なんて使えないから、どうしようもなかったわ」

「バリバリ武闘派だしな、お前。普段からもっと見聞を広めておくべきだったな」

花開院”八十流(やそ)”。それがこいつの肩書き。
八十流は妖刀造りやら、霊力を使った武器の振り方等々を手掛ける武闘派として広く知られている。
まあ、広くと言っても花開院内だけだが。

「真面目な話をしているのだけど」

「・・・・・・・すいませんでした」

キッと睨む皐さん。その睨み、村正級。
ちょっと場を和ませようとしただけなのにあんまりだぜ。

「話を戻すが・・・・遅化を使った方がいいんじゃないか？四日じゃ少なすぎる」

遅化。読んで字の如く、いろいろと遅くする術。
それを使えば、呪いの進行を遅める事が出来る。確か皐は使えた筈だが・・・・。

「言われるまでもなく、もう使ってるわ。・・・・・倍にして四日よ」

思っていたより事態は深刻のようだ。
四日。いや、三日内にゆらに呪術をかけている妖怪を探し出して滅しなければならない。

「あの・・・・・」

気まずそうに声を上げたのは家長さん。
大分話題に置いてけぼりを喰らっているみたいだ。

「早雲、家長さんを家に送ってあげて。流石にこの時間に一人で帰すのは危ないわ」

「わかった」

◇　◇　◇

家長さんを自宅まで護衛している。
夕刻の妖怪が今出て来てくれれば話は早く終わるのだが、そんな万事上手くいくほど世の中甘くない。

「・・・・・ゆらちゃんは助かるんでしょうか？」

「助けるさ。必ず、死なせたりはしない」

根拠も自信も無い。だが、ここで言い切れぬ様ならば、尚更助けるのは難しいだろう。

「・・・・・・ごめんなさい」

ぽつり、消え入るような声。

「うん？何が」

彼女の声は確かに聞こえ、聞き返す。

「私のせいで、ゆらちゃんは・・・・・・」

「何だ。そんな事か」

「そんな事って・・・・人の命がかかってるんですよ！」

「ゆらがやられたのは単なる力量不足だ。非はあいつにあるさ。家長さんが気にする事じゃない。それに、まだ死ぬと決まった訳じゃないだろ」

「でも・・・・「それ以上言うのはやめてくれ。助けられた君がそんなんじゃ、助けたゆらが居た堪れないだろうよ」」

陰陽師に限らず、助けられた人間が助けられた事を悔いているようでは、助けた人間が報われない。
命をかけて助けた様なら尚更だ。

「・・・・・すいません」

家長さんはこれ以上無いくらいにガックリと項垂れている。少し言い過ぎたか。

「さっきも言ったがゆらは必ず助ける。見てくれは頼りないかもしれないが、これでも一流の陰陽師なんだ。俺を信じてくれ」

「――――――ゆらちゃんを、お願いします」

「ああ」

皐(だれか)を頼りにしていてはダメだ。『俺が解決する』そんな意気込みで行かなければ。

・・家長さんを無事家に送り届けた。

時間は一刻を争う。大規模な探知を行った結果、妖怪が密集している家を見つけた。そこに行ってみるか・・・・・。

◇　　◇　　◇

Ｓｉｄｅ　皐

早雲は家長さんを送りに行っている。相手の力量がわからない以上は合流した方が良いんだけど、そんな事を言っている程時間は無い。よって一人街へ繰り出し、ゆらが相手した妖怪を探している。

つい最近多発していると言う『通り魔事件』。これの犯人はあの妖怪で間違いない。

何故なら家長さんが言っていた妖怪の容姿と、通り魔の目撃談の容姿がほぼ完全に一致するから。

容姿は髪の長い女性。服は白のワンピース。大きなマスクをしている。

曰く、一人でいる学生しか狙わないらしい。なんとも性質が悪い。

そして、開口一番にこう言う。

「――――――――――――わたし、きれい？」

「っ！？」

後ろから掛けられた声に、思わず飛び退く。

いつの間にここまで近づかれていたのか、目の前にはマスクの女性。服は白いワンピース、髪も長い。あとは妖気さえ出してくれれば完璧ね。

「・・・・・ちょっとビックリしたけど、棚から牡丹餅ってとこか

しら」

「アハッアハハハッハハハハハハハハッ、アハハハハハハハハハハハッ」

何が面白いのか狂ったように笑っていながら、ジリジリと寄ってくる。

・・・・・不快だわ。

今すぐにでも斬って捨てたい衝動に駆られる。

だけど、もしかしたら人間かもしれないと言う可能性も考えて、妖気を出すまでは攻撃はしない。

「わたし、きれい？」

二度目の問い。

「そうね。自分の感性に自信は無いけれど、綺麗なんじゃないかしら？」

本当にそう思ったわけじゃない。

ただ、こうしないと話が進まないのだ。

「フフッ、アハハハハハハッ。コレデモオォォッ？？？？？」

嬉々としながらマスクを外す女性。
マスクの下には耳に届きそうな程裂けた口。それをこちらに見せつけ、反応を楽しんでいるのか醜く顔を歪めている。
・・・・なんとも気色悪いわね。

「やっぱり、あなたで間違いなさそうね」

マスクを外した際に妖気が発せられた。
もう様子見は必要ないでしょう。

バッグにしまってあった霊刀を取り出し、低く構える。
銘を『”月不見月（つきみずづき）”』。

「八十流居合術――――――――『死閃』」

言って、刀を振るう。音速を越えた閃撃。

八十流居合術『死閃』。
お題目は『一瞬にして必中』

お題目通り、その一瞬にして妖怪の首を刎ね飛ばした。

「案外、呆気なかったわね」

妖怪の死屍に一瞥を投げ、帰路に着く。
欲を言うと最初の仕事だったから、早雲の実力を見ておきたかったけど、ゆらの命が懸っていたし、それは高望みかしらね。

何はともあれ、これでゆらは――――――

「アアアアアアアアアアアアッッッ！！！アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッッッ！！！！！」

響く慟哭。

・・・・・・音の発信源は確認するまでもない。
自分の後ろ、倒したと思っていた妖怪だ。

「なっ・・・・」

私が刎ねた首を手に持ち、逃げ去る妖怪。

・・・・・・迂闊だった。
なぜ、生死を確認しなかったのか。
なぜ、目を離したのか。

相手は妖怪なんだ。首が急所だとは限らないのに。

後悔しても、もう遅い。

――――――――妖怪は唖然し立ち尽くす私の視界の端へ消えて行った。

◇　◇　◇

Ｓｉｄｅ　早雲

「・・・・・・・『奴良さん』か」

自分の探知能力を頼りに辿り着いた奴良さん宅。
この家の中から異常量の妖気が漂い出ている。

「・・・・・・・・・・よし、行くか」

時間は２０時３０分。
普通なら来客は迷惑な時間だが、相手は妖怪。夜から本調子だろうし大丈夫だろう。

コンコン

「はーい。ただいまー」

聞こえて来たのは女性の声。
さてはたして、扉の向こうには鬼が出るか蛇が出るか。

ガラガラ

「あら、こんばんわ」

出て来たのは女性。妖気は感じられない。純系の人間のようだ。

さて・・・・・

「妖怪たちから、『集会』があると聞いたんですが、ここで合ってますかね？」

「ああ、『総会』の事ね。ここで合ってるわよ。ひょっとして、あなた妖怪さん？」

「そうです。『リーダー』にお話があってここに来ました」

「うーん。リーダーって言うのが誰かはわからないけど、皆、大広間にいるから、そこに行けば会えると思うわよ。ホラ、あがって」

「・・・・お邪魔します」

こうして俺は妖怪達の巣窟に乗りこむ事に成功した。
はたして俺は生きて帰る事はできるだろうか。

二話　町を歩けば棒に当たる（後書き）

Ｔｉｐｓ

”治療術”

霊力を使い、怪我自体を『無かった事』にする離れ技。
その代わり、怪我の大きさに伴って莫大な霊力が必要なうえ、『対象者が死んでいない事』と『妖怪につけられた傷限定』という制限がある。
だが、妖怪につけられた傷であれば、無生物でも治せるので、わりと重宝する術。

”呪い”

『原因は一切不明だがこのままだと死ぬ』っていう状況の総称。
言わば思考の放棄。昔は病気なんかも呪いだと言われていた。

”八十流”

花開院家の分家の一つ。花開院の中で最も戦闘力を持っている。
が、妖刀と言う力を振るう故か魔道に落ちる者が多く、妖怪の黒と陰陽師の白、それの混ざり合い地点として『灰色の陰陽師』なんて言われている。

”月不見月”

皐の実の兄であり、同門の師匠である、『秋房』より誕生日プレゼントとして作られ、贈られた霊刀。形状は脇差
誕生日プレゼントに刀とは如何なものかと思うが、皐自身は喜んで受け取っていたのでそこに突っ込むのは野暮だろう。

三話　虎穴に入り、虎子を得る（前書き）

散々迷った挙句、時系列は四国導入あたりになりました。

誤字報告、感想、苦言お待ちしております。

三話　虎穴に入り、虎子を得る

全国に散らばっていた、奴良組の妖怪幹部たちを集め行われる、奴良組幹部総会。
それが現在、この奴良家では行われている。いや、正確には行われていた。
『さっきまでは』行われていた。今この時は『闖入者』によって一時中断されている。
大広間では妖怪幹部である、”大妖怪”たちがコの字形式で鎮座している。そして、闖入者はその中心で神妙に正座をしていた。

（これはヤバいな。今が俺の人生で一番ピンチな時かもしれない）

闖入者、早雲は考える。
『これは如何なものか』と。数分前に考えも無く妖怪たちの巣窟に突入し、現在に至っては大妖怪たちの集会の中心にいる。今は自分が人間とばれていない為、妖怪たちは襲っては来ないが、その瞳に浮かぶは怪訝であり、敵意であった。
ばれたら襲われる。そんな状況が、此処にはあった。

「ふむ、一つ聞いて良いかの？」

沈黙を破り、声を上げたのは好々爺。見た目と纏う雰囲気からは想

像がつかぬであろうが、実はこの奴良組のトップである『ぬらりひょん』である。
訝しげな目を早雲に向けていた妖怪の面々は、そちらに目を向ける。

「・・・・・・何でしょうか」

あくまで平静に。ここで粗相があるようなら、死が待っているのは火を見るより明らかだった。
早雲にはこの好々爺が最高幹部であると言う事がわかっていた。座っている席が重役席である事や、溢れ出る妖気、他の妖怪たちの目線。

『そうであろう』と予想出来る要因は多々あるからだ。
そして何より、雰囲気・・・・・カリスマ性とでも言うのだろうか。
そんな物を、早雲はこの好々爺から感じていた。

「お前さん、陰陽師じゃろう？」

あまりに、確信に満ちた問い。
答えを聞かずとも、わかっているとその好々爺の瞳は語っていた。

「なっ、なんじゃとーーーー！？」

一番最初に驚愕の声を上げたのは、『自分は妖怪だ』と言う嘘を見

抜かれた早雲ではなく、奴良組の大幹部である『一ツ目入道』だった。
まあ、その驚きも無理は無い。言わば妖怪の本拠地である此処に、妖怪の天敵である陰陽師が堂々と座っていたのだ。

「そう思われる理由を窺っても？」

一ツ目とは対照的に早雲は冷静に返す。
だが、もう言い逃れは出来ないだろうと早雲の手には式符が握られている。

「勘じゃよ」

ぬらりひょんの簡素な答えに、成程と呟く早雲。
騙し合いにおいて最強ともいえる一手である『勘』。
その者の勘が鋭ければ鋭いほど、どんな巧妙な嘘も意味を成さない。

「これは一本とられましたね。やっぱり俺に騙し合いは向いていないようです。――――では出直すとしましょう」

自然な感じで後ろに向き直り、立ち去ろうとする。
この場より、逃げるために。

「・・・・・・・あの、どいて欲しいんですが」

『然うは問屋が卸さない』とはこう言う時に使う物だろうなと思う。
早雲を囲むように迫る大小さまざまな妖怪たち。

「陰陽師とわかってて黙って帰すわきゃねえだろ」

言うは一ツ目。言葉を発さず目配せだけで手下の妖怪を指示した辺り、相当の器量が窺える。
伊達に大幹部と名乗っていないと言う訳だ。

「だよなぁ・・・・」

式符を握り、隙を窺う。
囲まれている現況では、自分から動くのは愚策。と、相手の動きを待つ。

ガアアアアァァァッ

見るからに知性の無い鬼の妖怪が痺れを切らし早雲に襲いかかる。
しかし、先に動きを見せた妖怪より、早雲の方が遥に速かった。

「どっ、せぇい！」

その妖怪との距離を詰め、利き手で放った”コークスクリュー”。放った右手は見事に妖怪の顎を捉え、吹き飛ばし、沈黙させる。

そして、その妖怪が吹き飛んだ事により、包囲は解ける。物理的に見るなら小さな穴。けれど戦略的に見れば大きな隙。

「来い！式神”八咫烏”！」

式符を投げる早雲。

「いきなり呼び出すとは・・・・・。私にも都合があるのだから、事前にアポをとって欲しい物だな」

呼び出され、現れた彼女は『黒』だった。

紅黒く短い整った髪。黒瑪瑙の様に鈍く光る瞳。身に纏う黒いドレス。所々に炎が燃え盛る、身を包めるほど大きな黒翼。

実際は、彼女には様々な色が見受けられるのだが、彼女に対する妖怪たちの第一印象はやはり『黒』だった。

「式神が細かい事を気にするな」

早雲は呼び出した式神『八咫烏』と背中合わせになり戦闘態勢に入る。
妖怪たちもまた、構え直す。
無論、早雲たちは普通に戦えば勝算は０だ。だから、適度なところで逃げ出そうと考えている。

「・・・・・・やめんか！」

決して大きくは無い、けれど良く通る声で一触即発の空気を一喝したのは、ぬらりひょん。
その一喝で、この場にいる全ての者はぬらりひょんの『畏』に呑まれ、動きを止めた。
早雲もまた畏に呑まれ、動きを止めている。
余談だが、この場において人妖問わず畏に呑まれなかったのは、たった一人の『式』のみだった。

「そ、総大将！？」

またもや驚愕の声を上げる一ツ目。
この戦況は誰が見ても妖怪達の勝利。止める意味がわからないと言った調子だ。

「お前さん、此処に何しに来た？」

「・・・・・聞きたい事があるから来ました」

早雲は答える。
その言葉には先程までの年長者への形式的な敬語ではなく、妖怪ぬらりひょんへの畏怖の念が込められている。

「ほう、話を聞こうかの」

「正気ですかい総大将！？相手は陰陽師ですぜ！」

「一ツ目。お前さんの言いたい事はわかる。確かに、このまま倒してしまった方が手っ取り早い。だがな、この陰陽師を倒そうってんなら、少なからず『百鬼』の半分は犠牲になる」

ちらりと、早雲の呼び出した式を見やる。
それにつられ、一ツ目も目線を移す。

「てっ、てめェ！？八咫烏じゃねえか！」

一ツ目の今日何度目かの驚愕の声。
こうも驚愕に満ちていると人生楽しそうだ。

「――――――おや、誰かと思えば一ツ目入道ではないか。と言う事はそっちのちっこいのはぬらりひょんか。お前たち随分老けたな」

「何だ、知り合いだったのか？」

「そうさな。私も伊達に長生きしていないと言う事だ」

しばらく、早雲と八咫烏のやり取りを呆然と見ている一ツ目。現実に戻って来たのか走り行き、ぬらりひょんに耳打ちする

「ど、どういう事ですかい、ありゃあ・・・・」

「さあのう。何故かは知らんがあやつは陰陽師に手を貸しとる。それは紛れもない事実じゃ。陰陽師と戦うと言う事は、あやつと戦うと言う事になる。流石にそれはリスキーじゃろう？」

「・・・・・・ううむ、確かにそうですな」

・・・・・・・・・・・

「・・・・・・・・と、言う訳です」

話し合いを承諾した妖怪たちに、事の経緯を粗方話す早雲。

「ふむ、話はわかったが、わし等に何をしろと言うんじゃ？」

「俺がお願いしたい事は二つだけです。まず一つ目は、俺の言った容姿の妖怪に心当たりは無いか考えて貰いたい」

早雲の周りに鎮座する大妖怪たちも考える。
だが、全ての者に心当たりが無いらしく、やがて首を振る。

「残念ながらわしにも心当たりは無いわい」

正直な話、信用できるか出来ないかで言えば怪しい話だ。と早雲は思う
けれど、信用しなければ、前へ進めない。

「そうですか・・・・・。もう一つは些細なことです。明後日の夕方から夜にかけて、この街では妖気を発さないで頂きたい」

「もし、発したら？」

言うは一ツ目。
他の妖怪も気になっているらしく、息を呑み早雲を見ている。

「その場合は問答無用で滅します」

淡と告げる早雲。
そこに冗談の色は無く、本当にそうすると言う意思が見える。

「早雲と言ったか」

「はい」

「ずっと思っておったんじゃが、他の陰陽師と比べて随分変わった考え方をしておるのう」

ぬらりひょんの言っている事は尤もだった。
他の陰陽師たちは妖怪は絶対悪で即滅して然るべきと言う考えを持っているのに対し、早雲は道で妖気を消す妖怪にばったり会っても、知らんぷりをする。

気付いていないふりをする。

「どう考えても、全部の妖怪を滅する事は出来はしない。だから、俺は個人的善悪で選定して『滅すべき妖怪』を減らしてるんですよ」

妖怪の具体的数がわかる早雲ならではの考えだった。
かつてノアが全てを救いきれぬ人類から、『救うべき人類』を選定したように、早雲も全てを滅しきれぬ妖怪から、『滅すべき妖怪』を選定した。

「善悪ねえ・・・・。例えば、人を襲う妖怪は悪か？」

珍しく声を上げたのは、若き容姿をした奴良組の幹部の一人、『鴆』。
さっきまでは、早雲が妖怪の天敵である陰陽師と知り、我関せずと言った雰囲気で聞き流していたつもりだったが、自分でも気付かぬ間に話に聞き入っていたいたらしく、早雲に興味を持ち問う。

「そこら辺はかなり緩いです。基本的には殺せば悪、それ以外は善。と言ったところでしょうか。尤も、俺の見ている所で襲おうとするなら撃退しますがね」

「本当に緩いな」

「『人を襲う』と言う事は妖怪の存在意義みたいなものですからね。それを滅そうとしたら、『滅すべき妖怪』がかなり多くなってしまうんですよ。俺としては出来る限り滅するのは少なく済ませたい」

ほお、と声を上げる妖怪たち。
妖怪へ理解がある早雲に興味を持ったのか、この場にはもう、早雲に明確な敵意を向ける者はいなかった。

◇　◇　◇

「総大将、あの陰陽師、あのまま帰しちまって良かったんですかい？兵を揃えて攻めてくるかもしれませんぜ？」

一通り話し、帰る早雲の後ろ姿を横目で見つつ、一ツ目は言う。

「ふうむ・・・・・・」

・・・・・・あの土壇場で大妖怪ぬらりひょんを動かしたものは、彼の式、八咫烏の危険性ではなく、陰陽師早雲への興味だった。
約４００年前。羽衣狐と雌雄を決したあの日あの時。
僅か少しの間だが共闘体制をとった陰陽師。１３代目花開院”秀元

”。

今は亡き彼と早雲はぬらりひょんから見て『似て』いた。何がかはわからなかった。

もしかしたら４００年も前の事だから、気のせいかもしれない。

でも、それでもこの妖怪、ぬらりひょんを動かすのには充分足る理由だった。

そして、八咫烏を理由に一ツ目を制し、早雲から話を聞いた。

やはり、早雲は秀元と似ていた。

根本的な理由は違うものの、『妖怪の中で善悪を区別する』と言う考え方を持っていた。

「・・・・・やはり、それはなさそうじゃのう」

「どうしてそう思うので？」

「勘じゃよ」

ニッと好々爺の笑みを浮かべ、答える。

「・・・・そうですかい」

一ツ目は否定しない。
何故なら、この好々爺は大妖怪ぬらりひょん。彼の勘は超常の域を行っており、外れる事はまず無い。
そして何より、一ツ目自身の勘もまた、早雲は攻めてこないと言っていたからだ。

「それにしても、変わった奴じゃったのう・・・・・」

・・・・・・・・・・・・・

この日、奴良組総会で『ぬらりひょんの孫』に弓引いた逆臣『牛鬼』の裁決が行われた。
裁決を取り仕切ったのはこの総会の中で正式に若頭候補になった、孫本人であった。
そして、牛鬼に下った判決は『無罪』。その判決で奴良組内に大きな波紋を生むのだが、それはまた別のお話。

三話　虎穴に入り、虎子を得る（後書き）

Ｔｉｐｓ

”大妖怪”

花開院基準で言う大妖怪とは『陰陽師十数人で挑んで勝てるかどうか』の領域にある妖怪の事。

”コークスクリュー”

コークスクリューブローの事。

妖怪相手に無手ではダメージを与える事が出来ないと思われがちだが、早雲は筋肉を霊力で強化して放つため、妖怪相手でもわりと有効打だったりする。

もろに顎にヒットした妖怪の脳はさぞ揺れた事だろう。

尤も、妖怪に脳と言う概念があるかはわからないが。

”八咫烏”

見た目少女の式神。

元は大妖怪で、その時にぬらりひょんと会っていた為、面識がある。

名は『黒曜（こくよう）』。最初早雲が『黒豆（くろまめ）』と命名しようとして、殺されかけたのは内緒だ。

”秀元”

花開院家の当主に受け継がれている名前。

男でも、女でも秀元。

閑話　初めまして、花開院と申す者です（前書き）

オリキャラ設定

閑話　初めまして、花開院と申す者です

花開院（けいかいん）　早雲（そううん）

―容姿―

黒髪のボサボサ頭で長身痩躯。
だらしなさの化身とでも言うような出で立ちをしているが、一応は由緒正しき家の出の為、礼儀正しい。

―概要―

花開院分家『一心流』の現当主。
霊力の量と、妖怪探知能力が他の陰陽師と比べてぶっ飛んでおり、真面目にやれば　秋房以上の戦果を出せる。・・・・・飽くまで真面目にやればだが。

―性格―

事なかれ主義で、陰陽師であるにも拘らず、現行犯でもない限り妖怪と闘おうとしない。
真面目にやろうとしないのも、上層部の人間に実力者と認定され危険地に放り出されるのを恐れている為である。

―陰陽術―

符術、結界術、式神術、歩術を扱う。

―式神―

『五鬼』

早雲の式神の一つ（五匹）。
五匹の鬼で構成された一つの式で、基本的にボケ担当。

『八咫烏』

早雲の式神の一つ。
太陽の烏。元は大妖怪で本作最強キャラ。
現在は式神なので、早雲の霊力と言う限界があるため、本来の三割も力が出せない。

―一心流―

花開院家の分家の一つで、霊力での身体強化等の『歩術』を専門的に扱っている。

余談だが、一心流は生真面目な人間が多い八十流とはあまり仲がよろしくない。
主に、早雲の性格のせいで両家の仲に亀裂が入っている。

―容姿―

花開院（けいかいん）　皐（さつき）

銀髪ロング。遺伝の為仕方ないのだが、幼き頃はよく髪色でからかわれていた。
因みにその頃、最もからかっていたのは、竜二と早雲なのだが、二人とも一切そんな事は憶えていない。
いつか復讐をと胸に誓っているのも、二人の知らぬ事である。

―概要―
花開院分家『八十流』の陰陽師。
天才と言われている『秋房』の実の妹。

霊刀術の扱いに長けている。

―性格―
全体的に見ればしっかりしているものの、どこかしら抜けている。
やはり、生真面目であり、早雲の事をあまり良く思っていない。

―陰陽術―
基本的にほぼ全ての陰陽術を扱える。

―霊刀―
『月不見月』
妖刀作りの天才である兄から貰った霊刀。
退魔性能はリクオの持つ祢々切丸より優れている。ただし人間も斬れるので注意が必要。
無論、銃刀法的な意味で。

閑話　初めまして、花開院と申す者です（後書き）

閲覧ありがとうございました

四話　内輪喧嘩は烏も食わない（前書き）

閲覧ありがとうございます！

四話　内輪喧嘩は烏も食わない

花開院家の人間たちの思う、花開院皐（わたし）は『虚像』である。
私は天才ではない。私は秀才ではない。私は凡才だ。

謙遜ではない。本当に、私の才能は至極一般的な物だった。
特別秀でる事も無く、特別劣る事もない。そんな才能。

もし、『普通』の家の生まれであるならば、ここまで悲嘆はしなかっただろう。虚勢を張る必要もなかっただろう。
だがそれは『もし』の話。私は普通の家の生まれではない。
私は陰陽師一家『花開院』の生まれであり、その中での名門『八十流』の直系であり、何より天才と言われ慕われている『花開院秋房』の

実の妹だった。
――――――――決して凡才であってはならないのだ

血の滲む様な努力で周りの期待に応え。
それに伴い期待の重圧に負けぬ様に自信も付けた。

「その結果が・・・・・・・・・・これね・・・・・・・」

・・・・・・いつの間にか自信は慢心へと変わっていたらしい。
その慢心で妖怪を獲り逃した。
あの妖怪には警戒され、あんなチャンスは二度と訪れないだろう。

自信は、音を立てず崩れ去った。
残った物は花開院家からの大きな期待だけ。
『私には才能なんてない』そう告白すればどれだけ心の重荷が下りる事か。
天才の妹だから　と期待され、過大評価を貰う事も無くなるだろう。
それが出来ないからこそ、私は天才であらねばならないのだ。
たとえそれが、見せかけだけの張りぼてだったとしても。

今度は油断しない。ゆらは必ず助ける。
――――――――花開院皐(わたし)が天才であるために

◇　◇　◇

夜の闇に紛れる一人と一匹の影。
一人は壁に広告の様な物を壁に張っており、一匹はその者の頭の上で退屈そうに毛繕いをしている。
その挙動を遠目で見れば、不審者と誤認され敢無く御用となるだろう。
だが、一連の通り魔事件と、今が深夜と言う相乗効果により、人通りはどの大通りも〇。
そのため重要参考人としての逮捕には至っていない。

「なあ、早雲。お前は一体何をしているんだ？」

本来の姿は目立つため、見た目ただの小さなカラスに化けている八咫烏『黒曜』は問い掛ける。
カラスな為、表情の変化はわからないものの、口調からは相当の呆れの色が見える。

「ここに来てその質問か」

壁に広告を張りつけながら早雲は言う。
その実、この広告張りは一件目ではない。
既に八件の場所に同じように広告を貼りつけ、只今九件目だ。

「ああ、聞くタイミングを逃してしまってな。・・・・・それで、何をしているんだ？」

「ううむ、改めて聞かれると、どう言い表したらいいものか・・・・・。まあ、百聞は一見に如かずと言うしな。これを読んでみろ」

と、黒曜にも見えるぐらいの位置まで広告を持ちあげ、広げる。
どうでもいい事だが、頭の上のカラスに広告を広げ見せる少年の図は、何とも形容しがたいシュールさがあった。

「通り魔事件の情報募集中・・・・？ほんの些細な事でもいいので情報を持っている方はご連絡ください？・・・・・・・随分他人任せじゃないか。私はあまりそう言う事は好きじゃないな」

その広告には『うちの犬探しています』的な事が書かれていた。

「完全にこの情報頼りってわけじゃ無いさ。ちゃんと考えはある。それに、お前が好こうが好かまいが知ったこっちゃない」

「それは凄く残念だ・・・・・。私はこんなにお前の好みを気にしていると言うのに・・・・・」

「カラスに言われても何ら嬉しく無いな」

一通り張り終え、次の場所へと足を向ける早雲。

「それは遠まわしに人の型を取れと言っているのか？ならば・・・・・
「目立つからやめてくれ」」

元の姿に戻ろうとする黒曜を制する早雲。
この場を警察に抑えられれば事情聴取は確実。もしかしたら履歴に

書かれ、今後の進路に響くかもしれないので結構必死だ。

「まあ、私のスター性はこの暗闇を照らし尽してしまうからな・・・・・」

「スター性と言うか、お前は太陽(スター)そのものだろ」

しばしの沈黙

瞬間、黒曜はクチバシで早雲のデコを突く。

「痛っ！？なっ、何で！？」

ほぼ零距離での攻撃を避ける事が出来る筈も無く、ヒットし、驚嘆の声を上げる。

「『上手い事を言ってやった』という事を考えていそうな顔が勘に障った」

「・・・・・・もう少しそのクチバシの危険性を考えてくれ。加減が加減なら刺さるぞ？それ」

「気を付けよう」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「・・・・・これ位で充分だろう」

その後、さらに数件回り、ある程度張り終えたところで早雲は言う。時刻は夜更けも夜更け。丑の刻ぐらいだ。

「やっとか・・・・・凄く眠いぞ私は」

深夜にひたすら人が張り紙を張っているのを見る。それは人知を越えた存在である式神にとっても、辛く険しいものだった。

「ああ、俺もだ。とっとと帰って寝るとしよう」

「そういえば早雲。あの広告に書かれていた”英語の羅列”は何なんだ？」

「ああ、あれか。・・・・・・・あれは、お前にはわからんだろうよ。”そう言うもの”だ」

「・・・・・・・・そうか、そう言うものか」

◇　◇　◇

Ｎｅｘｔ　ｄａｙ

陽光が瞼に差し込み、朝を認識する。
意識を覚醒させ、重い体を起こす。・・・・・・そういえば昨日は夜遅くまで起きてたっけか。
大きく背伸びをし、陽の光を見やる。

「・・・・・・・・・・・・何の嫌がらせだよ」

てっきり窓から陽の光が入って来ているものだと思ったが、そんな

事は無かった。
というか、今はまだ陽はまだ昇っておらず、地平線の向こうがほんのり白んでいる程度の時間帯だった。
では、何故陽光が部屋を照らしているのか？
その理由は実に単純だ。

「コケコッコー。おはよう、朝だぞ早雲」

全てはこの鶏の声真似をしているカラスのせいだ。

どう言う訳があってか、このカラスは炎で燦々（さんさん）と輝き、プチ太陽と化している。
何とも迷惑極まりない行動である。

「何をしているんだお前は」

色々言いたい事が頭を過るが、口は一つ。
一度に全てを吐きだす事は出来ない。
よって、最も気になる事を問う。

「何だその目は。皐が帰って来たから起こしてやったんだぞ」

クチバシで器用に毛繕い―（？）をしながら語る黒曜。
プチ太陽化は停止しており、今ではただのカラスだ。

「ああ、今帰って来たのか」

昨日俺が帰ってきて夕食・・・・もとい夜食を食べ、床に就くその時まで皐は帰って来なかった。
俺が深夜に帰って来たように、陰陽師は哨戒やら何やらで基本的に夜は忙しい。
寝る時は、そのうち帰ってくるだろうと思って気にせず寝たが、まさか夜明けまで帰って来ないとは・・・・・。

「今リビングで朝食をとっているぞ」

「そうか。すまないなわざわざ起こして貰って」

「気にするな」

収穫があったか聞いてみるか・・・・・・。
身支度をしリビングへ足を向ける。

余談になるがこのマンションは２ＬＤＫだが、個室が４部屋ある。
二部屋は元々このマンションにあった部屋。もう二部屋は皐と俺がそれぞれ術で作った物理法則を無視した部屋だ。

リビングに前述の四部屋、及びバスルーム、トイレ、玄関と全ての部屋につながっている。
どの部屋に行くにしても跨ぐ部屋はリビングのみ。かなり便利な構造だ。

花開院本家の屋敷とは豪い違いだ。
あそこは部屋だらけでコンパス持って行かないと遭難するからなぁ・・・・・・。

「よう、皐。おかえり」

自室からリビングまでを挟む壁は一枚。
あっという間にリビングに着く。

リビングには大きなテーブルが一つとそれを囲う様に背の高い椅子が四つある。
その椅子の一つに。皐は座っており、朝食であろうパンを食べていた。

「・・・・・・・・ただいま」

収穫が思った以上に無かったのか、沈みに沈みながらパンを頬張っ

ている皐。
どれ位沈んでいるかと言うと、頭の上にカラスが乗っている少年に話しかけられても物ともしない位だ。
あまりの沈み具合にマイナスイオンとか出てそうだ。マイナスイオンが何かはわからないが。

「どうした？何かあったのか？」

「何でも無いわ」

遠まわしに「触れるな」言っている様だ。
あまり深く突っ込むとますます嫌われそうだ。

「そうかい」

まあ、それに関しては触れないが、聞いておかねばならない事もある。
触れてはならぬ地雷かもしれないが、そうでないと信じて聞くとしよう。

「――――で、どうだ？妖怪は見つかりそうか？」

「ッ！？」

瞬間、皐の顔がさらに険しくなる。

・・・・・どうやら地雷だったようだ。

もしかしたら徹夜で探して一切の成果が無くてプライドが傷付いたのかもしれない。

優秀な人間程プライドが高いと言うしな。

「あー、そうか。・・・・・・・まあ、あと三日あるんだ。そう気を落とす事は無いさ」

「どうしてあなたはそうも楽観的なの！あと三日しかないのよ！？」

コップ一杯の水、それが多いと思うか少ないと思うかは人それぞれ。どうやら皐は後者の人のようだ。

「いや、お前が悲観的なだけだろ。・・・・・その妖怪がうろつくのはこの街だけ。しかも時間限定こそあるものの、被害者は毎日増えて

いる。・・・・・・多い時は一日で十数件だ。――――と言う事は、俺達が一般人のフリをして徘徊していれば嫌でも一度は遭遇するだろ」

自分の見解を述べる。
普通に理に適っていると思う。

「私は、もう・・・・・・」

何かを言おうとしているが、言い辛い事なのか、口籠っている。
表情が今にも泣きだしそうで、聞くのが躊躇われる。

「何だ？」

だが俺は聞く。
そんな中途半端に言われては気になって夜眠れなくなるし。
花開院早雲は意欲的人間なのだ。

「私は・・・・・・。――――――――――くっ！」

結局言わず、立ち上がり玄関に駆け行こうとする皐。

「待て待て！何処へ行く！？」

俺達は陰陽師とはいえ学生だ。
昼間は学校に行かなければならない。将来的に考えて。
ここで出掛ければ、こいつは徹夜明けで授業に臨む事になる。
そんな事になれば授業は頭に入らず、試験前に覚え直さなければならないと言う、二度手間に直面する事になるだろう。
この場は、たとえ一時間でも寝ておいた方がいい。将来的に考えて。

「決まってるでしょ？あの妖怪を探しに行くのよ」

「馬鹿を言え。今は早朝だぞ？見つかる筈が無い」

妖怪が早朝に一切出ない訳ではない。
だが少なからず『あの妖怪』は夕方～深夜しかでない。
そう言う”噂”があるから間違い無い。

「それでも見つけるの！」

駄々っ子の様なセリフを残し、駆け出て行ってしまった皐。
あの超常的な理論を持ちだされては、止め様がない。

「最初会った時は聡明な少女だと思っていたが、考えを改めなければならないな。彼女はあまり頭の良い方の人間ではないらしい」

頭の上に乗っている黒曜が言う。
今までのシリアスなシーンを、頭の上にカラスを乗っけたままやっていたと思うと、雰囲気ブチ壊しもいい所だなと思う。

「いや、あいつは頭は良いよ。ただ少し、肝心なところが抜けてるだけなんだ」

玄関の扉を開き外を見る。
既に何処かの死角に入ったのか、皐の姿は見つけられない。

「なんだ、追うのか？」

「ああ、泣いてたし放っておく訳にもいかないだろ」

「・・・・・解せないな。弱き者は切り捨てた方が合理的だろう？」

「弱くない人間なんていないさ。だからこそ人は支え合うんだよ。あいつは今、支えを失って倒れかけている。だから俺が支えてやるのさ」

人と言う字は人の支え合いで出来ている　と誰かが言っていたな。

「また建前の美談か。・・・・・・要するに何なんだ？」

あまり美談は好きではないらしい。
因みに、黒曜の最も嫌いな言葉は『助け合い』だそうだ。
人間を否定するのもいい加減にして欲しいものだ。

「このまま放っておいても寝覚めが悪い」

「最初からそう言え」

◇　◇　◇

と言う訳で外へ出て来ている。
朝食は食べていないが、昨日（今日）の夕食（夜食）を食べたのが遅かったからか、空腹感は無い。
ほど良い腹の満たされ具合だ。

「勢いよく飛び出していたが、アテはあるのか？」

「ないな」

行動を予測できるほど仲がいい訳でもないし、あいつの行きそうな場所を知っている訳でもない。
昨日の今日越して来たばかりだしな。

「だがまあ、あいつは目立つよ。髪色的に考えて」

「そうは言っても、姿が見えなければ目立つも何も無いだろう」

まあ、確かに。
死角に入っているんじゃあ、どれだけ目立つ物でも見つける事は不可能だろう。

「高い所から探せば良いんだよ」

例えばホラ。空からとか

「私に飛べと」

「良いじゃねえか。減るものじゃないし」

頑張れ鳥類！お前なら出来る！
必ず出来る！
・・・・・と言うか出来なかったらその翼は一体何のために付いているんだ。

「ごっそり減るな。私のエネルギーが」

「そのエネルギーは俺から供給されていると言う事を忘れるな」

「・・・・・・・やれば良いのだろうやれば」

渋々と言った調子で俺の頭の上より飛び立つ黒曜。
ある程度の高さまで到達した所で、円を描くように旋回する。
遠目で見ると普通のカラスみたいだ。
・・・・・・いや、すぐ近くに居ても普通のカラスにしか見えないか。
あいつ、しゃべる事を除いては完全なカラスだし。
ゴミ捨て場で生ゴミ漁っててても、何ら違和感無いし。

「お前が失礼な事を考えている間に、見つけて来てやったぞ」

戻って来た黒曜にサラッと心を読まれた。
なぜばれた。

「何を不思議そうな顔をしている？お前は知らないかもしれないが、式神と術者は霊力での繋がりが出来ている。心を読むなど容易い事だ」

「そ、そうなのか」

これは迂闊に物事を考えられないな。
逐一読まれたら堪ったもんじゃない。

「ああ、嘘だ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・で、皐は？」

突っ込んではダメだ。突っ込んではダメだ。
ここで突っ込んだらこいつの思うつぼだ。

「フッ。――――――――ついて来い」

勝ち誇ったような笑み（俺にはそう見えた）を浮かべた後、俺の前を飛び行く黒曜。

・・・・・・何だろう、この敗北感は。

四話　内輪喧嘩は烏も食わない（後書き）

”英語の羅列”
いわゆるメールアドレス

”そう言うもの”
早雲がジェネレーションギャップが生じた時に使う言葉。
一々説明するのが面倒くさい時は、この言葉で全て片付ける。

”噂”
妖怪には、噂や怪談より生まれるタイプの妖怪がいる。
そう言うタイプの妖怪は絶対にその噂と合致した容姿、特徴をしており、そう言う妖怪を相手取る時は情報収集が不可欠である。

五話　内輪喧嘩は鬼とて食わない（前書き）

おれのＰＣが火を噴いたぜ！

・・・・・比喩とかでなく

閲覧ありがとうございます！

五話　内輪喧嘩は鬼とて食わない

昨日まで一緒に笑い合っていた者が死ぬ。共に夢を語り合った者が死ぬ。
親が戦場に赴き、帰って来たのは遺骨だけ。
・・・・・なんてこと戦場では日常茶飯事である。

幸い、日本は戦争を行わない。
第二次世界大戦の敗戦から多くを学び、平和主義を掲げているからだ。
そのお陰で多くの者が戦場に行かず済み、今日も平和に暮らしている。

尤も、それは飽くまで日向に生きている人間たちだけ。
日陰は今日も今日とて戦場で、多くの者達が明日を勝ち取るために武器を手に　殺し、殺されている。

◇　　◇　　◇

浮世絵町と他の町とを繋ぐ『浮世絵大橋』。
早朝ではあるものの、遠方出勤な人が多いのか、車道側には多くの車が行き交っている。
それとは対照的に歩道側の人気は絶無であり、唯一人を除いて人影は無い。
その唯一人の少女は、今にも橋から飛び降りそうな雰囲気を持って、橋の下に流れる川を覗いている。

「なあ早雲」

「何だ相棒」

「相棒と呼ぶな。馴れ馴れしいし気持ちが悪い」

「良いじゃないか。昔からちょっと言ってみたかったんだ」

「お前の感性は全くもって理解出来ないな」

「妖怪に理解されようなんて思ってないさ。――――で、なんだ？」

「何度もこの質問で悪いが・・・・お前は一体何をしている？」

川を覗く少女を、物陰から覗く少年、花開院早雲。
これでも、京を代表とする一流陰陽師である。

「いやな、カッコ良く飛び出してきたはいいものの、何て声かけたらいいのかわからない」

・・・・・・・・これでも、京を代表とする陰陽師である。

「お前は乙女か」

「だってよ、ホラ、見てみろよあいつの顔。世界に絶望し尽くした顔してるぜ？どう声掛けろってんだよ」

「つべこべ言わずにさっさと・・・・・行ってこいッ！」

あまりの煮え切らなさに気色ばんだ黒曜は、変化の術を解き、背後から早雲の腰に回し蹴りをかます。

背後より零距離で放たれた蹴りに、対応できる筈も無く――――――

「ガッ――――――」

蹴りは狙い通り早雲の腰を捉え、蹴り飛ばす。

人の域を越えた蹴りをモロに受け、文字通り空を飛ぶ早雲。

無論、何処までも飛んで行くという訳はなく、ある程度勢いを失った地点から徐々に高度が落ちてゆく。

「――――――ハァッ」

十数の間をおいて、ビターン　と言う壮大な着陸音と共に、浮世絵大橋に降り落ちる。
黒曜の神がかった力加減故か、皐の真後ろに。

「ちょっ。あんた、大丈夫!?」

「自分でも・・・・・不思議だが・・・・・死んでは・・・・・いないようだ・・・・・」

息が絶え絶えになりつつも、答える早雲。
後に彼は語る。『あの航空旅行は俺でなければ死んでいた』と

「早雲!?何でここに?・・・・・ていうか何で空から!?」

超常の術を扱い、人知を越えた妖怪を相手取る皐にとっても、知り合いが空より降ってくるのは動揺に値する事のようだ。

「ちょっ・・・・・ちょっと・・・・・・・時間をくれ・・・・・・」

恐ろしい速度で息を整えていく早雲。
体つきは細々としていて弱々しいが、実は不思議なくらい丈夫なこの男。
恐らく軽トラにはねられても、その後平然と立ち上がる位のタフネスを備え持っている。

「――――――よし。落ちついた。・・・・・・何で空から　だったな。――――まあ、あれだ。お前が物悲しそうな顔をしていたからな。飛んで来たんだよ。文字通りな」

ビッと親指を立て格好つけているが、実際早雲にも自分が何故飛んで来たのかわかっていなかったりする。
この尋常ならざる適応力も、この男の持ち味である。

「意味がわからないわ」

全世界のあらゆる学問を用いても、この状況の意味について理解することは不可能だろう。

「意味なんて気にするな。それで、泣きそうな顔してたが、何かあったのか？」

「・・・・・あんたには関係ないでしょ」

皐の顔に影が射す。

「関係あるね！ありだ！おおありだ！関係あり過ぎて俺自身ビックリするぐらいな！」

一つ。パートナーには万全な状態で戦って貰いたい。主に俺の負担を軽くするために。
二つ。お前に何かあったら俺はお前の兄貴に叩き斬られる。
三つ。これを機にお互いの間に存在する謎の距離を縮めたい。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

皐は答えない。
仮初めの自身の誇りの為に。

「はぁ・・・・・。まあ、どうせアレだろ。妖怪と接触したのに取り逃がしちゃったとかそんな所だろ」

「ッ！・・・・・そ、そんな訳ないでしょ」

名探偵早雲の余りの推理力に驚きを隠せない皐。
大慌てで否定しているが、むしろそれは肯定の意しか持っていない事に、皐は気付かない。

「まあ、そんな気にする事でもないだろ。妖怪の取り逃がしなんて誰でもある。それ位、パートナーの俺がカバーしてやんよ」

「普通(あなた)と一緒にしないで。私は天才なの」

ズキリ　と皐の中で何かの軋む音がする。
花開院皐は天才でなくてはいけない。だが実際は皐は人並み程度の実力しか持っていない。
だから、誇張する。自身の底を見られぬ様に。

「天才ねえ・・・。果たしてそれは陰陽師(おれたち)の世界でどれほど意味のある物なのか・・・・・。皐、模擬戦をしよう。俺が才能の意義について説いてやる」

◇　◇　◇

場所は移り、河原。

皐は愛刀を手に持ち構え、早雲は拾ったのであろう木の枝を構え、
お互い開戦の合図を待っている。
緊迫した空気が漂う。

「そんな棒きれで戦うつもりなの？」

静寂を打ち破ったのは皐。
早雲の手にしている流木は、実のしっかりとした様な物ではなく、
少し力を込めただけで折れそうな程、細々とした木の枝だった。

「おうよ。俺の愛刀『龍木丸』だ。舐めると痛い目見るぜ？」

当て字こそカッコ良さげな雰囲気を醸し出しているが、発音上は『
流木丸』である。

「愛刀って・・・・さっきそこで拾った木じゃない。そんな物を刀
と言うなんて全国の刀職人と剣術士に失礼よ」

「はっはっは。そんなん知らんがな！」

場に静寂が戻る。

張り詰めた空気。
互いが互いの出方を見る。

数秒の間を置いて、先に動いたのは
早雲だった。

「”呪縛槍”ッ！」

流木丸をビッと皐に向け、術名を言う。

瞬間、淡い光が早雲の頭上に現れ、その光は像を結び、槍と成る。

その槍は流木丸の指揮に従い、皐へ向かいゆく。
皐と早雲の距離は十数メートルあったものの、呪縛槍の速度は速く、
射出から着弾まで数秒とかからない。

パリィィン

まるで、ガラス細工が崩れたような儚き音を立て、早雲の放った槍
はあと一歩皐に届かず砕け散る。
たかが一歩。されど一歩。

その一歩こそが皐の振るう霊刀『月不見月』の射程圏であり、絶対
防御圏であった。

「結界術は霊刀や妖刀とは絶望的なほどに相性が悪い。陰陽術の基本よ。忘れたの？」

月不見月を抜き身で手に持ち、悠然と立つ皐。

呪縛槍は『結界術』にカテゴライズされており、その結界術は皐の振るう霊刀とは相性が悪い。
どんな熟練者が堅固鉄壁な結界を張ろうとも、素人であれ妖刀を振れば、豆腐のように斬れてしまう。
それほどまでに、相性が悪い。

「相性なんてな、ゴリ押しで何とかなるもんなんだよ。呪縛槍ッ」

再び皐へ流木丸を向ける早雲。
そして現れる槍。

さっきと違うのは、大きく増えた槍の本数。

「十六連装だ。これなら相性云々は関係ないだろう」

早雲の頭上に留まっている十六の槍が時間差で射出されて行く。
皐を穿つため。

「・・・・・・ッ！」

皐とて無能ではない。
その場に留まる事はせず、回避と攻撃。両方を行うため早雲の側へ駆け行く。
進路の邪魔となる槍だけ剣戟で砕き、その他は最低限の動きで避ける。

「・・・・・チッ」

結果、早雲は十六の槍を外し、皐は月不見月の射程圏まで早雲に接近する。

「ちゃんと狙ったらどうなの？」

ここぞとばかりに皐は剣戟を振るう。
勿論、峰打ちで。

皐の下段からの斬り上げ。
それを早雲は後方へのステップで回避する。

皐の持つ月不見月は脇差（わきざし）。出こそ速いが、リーチはこれでもかと言う程に短い。
大きく一歩下がられればそこは既に射程圏外。

「お互い攻めあぐねてるな。”呪縛剣”」

言うと同時、早雲の頭上に発生する八つの剣。
早雲が流木丸を皐に向けると同時、剣は固定を解かれ一つづつ時間差で射出される。

「くっ・・・・・・」

皐は至近距離での射撃の回避は困難だと考え、後方へ下がりつつ剣を一本づつ避け、或いは破壊していく。
全ての剣の回避と破壊が終わる頃には、詰めた距離がまた離されていた。

「逃げに徹する戦法。なんとも情けないわね」

「武器もった奴相手に、近接を挑む馬鹿が何処にいる」

距離が離れたとて早雲が決定的有利になった訳ではない。
また距離が詰められれば、さっきの様な綱渡りになる。

さっきは運良く皐の刀が届く前に回避行動を取る事が出来、辛うじて再び距離を置けたものの、次はそうもいかないだろう。

だから早雲は、次の手札を切る。

「いでよ我が式『五鬼』っ！」

式符を放ち、式神を呼び寄せる。

「「「「「五鬼参上」」」」」

煙と共に五匹は現れ、各々が謎のポーズをとっている。

「あんた式神術使えたのね。知らなかったわ」

さも、驚いているかのようなセリフだが、皐は無表情で淡々と告げている為、実際驚いてるかはわからない。

「まあ、俺も常に惰性に生きている訳じゃないってことだ。進化してんだよ、俺も」

早雲は式神『五鬼』の一匹である紫鬼『干瓢（かんぴょう）』の頭をぺしんぺしん叩きながら言う。

「ところで、早雲。頭に何か違和感を感じるんだが・・・・・」

干瓢は言う。

「気のせいだ。たとえ気のせいでなかったとしても、気にするな」

早雲は言う。

「そうか。わかった」

何がわかったのかはわからないが、何処か納得顔の干瓢。

「じゃあ、行ってこいお前ら。δ(デルタ)作戦でな」

早雲は予め示し合わせてある作戦名を告げる。
五鬼は五匹間のコンビネーションが長所の式神。それを活かすための作戦の示し合わせである。

「「「「「応ッ！」」」」」

活きのいい掛け声と共に、五鬼達は左右へ展開し皐へ襲い掛かる。
鬼の機動力は凄まじく、本来なら十数秒かかるであろう距離を僅か数秒で詰める。

（向かって来てるのは四匹。自分よりあの式の方が動きが早い以上、左右に避けるのは隙を晒す事になるから不味い・・・・・。だったら――――）

皐は四匹の鬼へ真っ向から向かい行く。
お互いが距離を詰めようと進んだことにより、一気に距離は詰まり、お互いがお互いの射程圏に入る直前。
そこで皐は――――――――、跳んだ。

「「「「なっ、何ィ！？」」」」

五鬼は背が低い。それを利用しての一か八かの策だった。
早く跳び過ぎれば、策を見切られ跳んだ所を狙い撃たれ、跳ぶのが遅ければ、式の四匹の餌食となる。
だが、苦肉の策は功を成した。
後、早雲と皐の間を隔てる壁はあの紫の鬼のみ。

「行ける――――――」

駆けながら、嬉々とした声が漏れる。
紫鬼との距離はもう数歩で埋まる位の距離。
そして後ろには早雲。あの紫鬼を倒せば、もうこの勝負は決まったも同然だった。

「通さんぞ」

立ちはだかるは紫鬼こと干瓢。
だが、皐は怯まない。
己の剣戟は初見では絶対に避けられないという自信があったからだ。

「どきなさいっ！」

月不見月を上段で振り降ろす皐。
読み通り、干瓢は避けられず、肩から腰にかけての刀傷を作って、倒れ伏す。

「「「「「カンピョオオオオオォォォォォッ！！」」」」」

同胞を斬って捨てられ叫喚する残りの四鬼。

「まさか跳び越えてくるとはな」

「あとはアンタだけよ。尤も、もう勝負は決まったようなものだけどね」

干瓢の屍を背に、早雲へ刀を向ける。

「まあ、あれだ。お前が干瓢を斬って倒すのは織り込み済みってやつさ」

言って、早雲は人差し指と中指を立て、口の前に持ってくる。

「――――――『爆』」

早雲が言った同時、皐の後ろに倒れ伏す干瓢の屍が、文字通り――――――――爆裂した。

ドォンッ　と言う爆発音を立て、巻き起こった爆発は、皐を飲み込んで吹き飛ばした。

「「「「カンピョオオオオオォォォォォォッ！！」」」」

そして盛り上がる外野達。

「くっ・・・・・・・！」

突然の事だったので当然受け身はとれず、そのまま吹き飛ばされ、倒れた。

『まだ負けた訳じゃない』そう思い、立ち上がろうとする皐。

しかし、腕が、足が、体がまるで杭に打ち付けられたかのように動かない。

そして、気付く。

「・・・これは・・・・・呪縛剣・・・・・ね」

自身の四肢にはまさに磔の様に呪縛剣四本が刺さっていた。

「残念だったな皐。戦場ではな運や戦況、不確定要素で勝敗が決まる。才能なんてもん特別意味を成さないんだ。どれだけ才能がある奴だって死ぬし、どれだけ努力してる奴だって死ぬ」

流木丸をクルンクルンと手で回しながら説教を始める早雲。

今は皐は磔状態を解除され、その場に座り込んでいる。

「現実、凡人の俺はお前に勝ったし、ゆらに竜二、秋房にだって模

擬戦だったが勝った事がある」

秋房に関しては六戦一勝四敗一分けでボロ負けだったりするが、例に挙げている。

「あなたが、兄さんに・・・・？」

自身の知る兄は完全で最強だった。

信じられない　そんな怪訝に満ちた顔で聞き返す皐。

だが、完全否定は出来ない。事実上、早雲は強かった。

「おうよ。だから、戦場に生きている俺達陰陽師を才能で価値を決めようなんて、お門違いもいい所だ」

「そう、なのかな」

『陰陽師は才能で価値が決まらない』

その言葉が、皐にのしかかる重荷を軽くする。

「そうだとも」

この瞬間、少し早雲への見方を変えた、皐であった。

五話　内輪喧嘩は鬼とて食わない（後書き）

Ｔｉｐｓ

”呪縛槍”

結界術の一種で、符などの備品を必要としない経済面で優しい術。
直接的殺傷力の無いが、刺さると、その場に固定され動けなくなる。
ただ、刺さった箇所以外は動かす事が可能なので、連続で数本刺さなければ効果は薄い。

”呪縛剣”

呪縛槍の剣バージョン。
槍より小さく、構成が簡単なため、槍より出が早い。
ただし、長距離を飛ばす事は出来ず、近距離専用。

どちらの術も、早雲は好んで使うがあまり得意ではなく、目標を大まかながら設定する媒介（今回で言うと流木丸）が必要。

上級者は誘導弾とかも可能。

六話　日常と非日常は紙一重（前書き）

常日頃感想待ってます！
きがるにどうぞ！

六話　日常と非日常は紙一重

俺は普通の家庭に産まれて普通に暮らし、生きたかった。

――――まあそれは、普通な事情の家庭ではないからこそ思う事であって、実際に普通な事情の家庭に産まれれば、変化ない毎日に退屈し、変化ある毎日に憧れたことだろう。

『人は今ある物を否定し、無いものを求める。』

なかなか、ままならないものだな。

◇　◇　◇

こんにちは。

俺です。花開院早雲です。

決闘の後、やけにしおらしくなった皐を連れ、朝礼前ギリギリに登校した次第であります。

ちなみに現在は昼放課。

屋上に行って昼飯の唐揚げ弁当（税込２５０円）を食べようとしていたのですが、

「――――ほう！という事はあなたは花開院さん・・・・ああいえ、ゆらさんのお兄さん方ですかっ？」

やたらテンションの高い後輩に捕まりました。

「ちげーよ。従姉妹（いとこ）みたいなもんだ。直接の血縁はない」

「成る程、ならば陰陽師の同僚といったところですか！」

やたらテンションの高いこの少年は清継と言うらしく、オカルト研究部の様な部活の部長だそうだ。
そして、何故か俺はこいつに屋上に向かう行き道で呼び止められ、挙げ句事情聴取をうけさせられている。

「あーそうそう。そんな感じだよ」

正直、凄い面倒臭い。
そんな面倒臭さが顔に出ているのか、清継くんの周りの取り巻きたちは心底気の毒そうに俺を見ていた。
助けろよ。おい助けろよ。

「陰陽師が続々と派遣されたと言うことは・・・やっぱりあのお方は直ぐ近くにいるのかっ！！」

やたらテンションが高ぶって、一人別世界へ旅立った少年はおいといて、取り巻き達の説明でもしておこうか。
そうしよう、それがいい。

「あの、ごめんなさい。昨日の事、話ちゃって・・・。迷惑ですよね・・・・」

一人目は昨日の被害者。家長さん。
俺の角の立った問答に罪悪感を抱いたのか、早速謝ってきた。

「まあ、気にしなくていいよ。ゆらと仲が良かったのなら、事情説明はしておいた方がいいだろうし」

実際凄く迷惑だったのだが、面と向かって迷惑と言える訳もない。
花開院早雲は、わりと協調性に重きを置く人間なのだ。

「花開院さ・・・・ゆらさんの調子はどうなんですか？」

ゆらの調子を聞いたのはオレンジ髪のメガネ少年。
女か男かわからないような、中性的な顔立ちをしている。
俺が少年だと断じたのは言わばなんとなくそんな気がしたからである。

本質的に感じるカリスマ、と言うのだろうかこれは。
名前は『奴良』くん。この間潜入した妖怪屋敷と奇しくも同じ苗字だった。
まぁ関係者と見て間違いないだろうな。
こいつ妖怪みたいだし。
ちなみに何故かジャージ姿である。

「早けりゃ明後日には学校に復帰出来るだろうよ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。」

取り巻きの最後の一人。
黒髪ロングのマフラー少女、及川（おいかわ）さん。こいつも妖怪だ。
及川さんは奴良くんの前に守る様に立ち俺に対し、いてつくはどうの様な殺気を飛ばして来ている。
警戒するのは天敵である陰陽師が目の前に居るので当然の行動ではあるが、気付いてくれと言わんばかりの殺気を飛ばすのは、やはりやり過ぎと言うものではないだろうか。

「そっ、そうなんですか！それは良かった！」

なんて言いながら、今にも飛びかかって来そうな及川さんのマフラーをガシッと掴み制する奴良くん。
彼からは苦労人のオーラが発せられているな。

「ま、そう言う事だから君らが心配してくれるまでもないよ」

それじゃ　と話を切り上げ屋上へと続く階段へと足を向ける。
昼放課とはあまり長きものではないのだ。

「ま、待ってください！あのお方・・・・・百鬼夜行の主について知っている事はありませんかっ！？」

――――しかし、回り込まれてしまった。
言ったのは清継くん。

百鬼夜行の主って何だよ・・・・。

・・・・・・ああ、あの爺さんかもな。何となくそんな感じだったし。

「さあね。知ってるならとう昔に滅しているよ」

まあ、知っても滅しはしないけど。
だって百鬼夜行の主なんて奴を相手にしたらまず勝てないだろうし、

万一勝てても滅したら報復がくるだろ。長生きしたいんだよ俺は。

「まあ、なんだ。そんなに気になるんなら俺達みたいな『逆サイド』に聞くより、そう言う側の奴らに聞いた方が効率的だと俺は思うよ。例えば――――――」

――――――ホラ。

君の隣にいる及川さんやら奴良くんやら。

二人を一瞥する。

「？」

表現が間接的すぎたか、頭の上にはてなマークを乗せる清継くん。

君はもう少し推理力を養った方がいい。

「ほらっ！清継くん昼放課終わっちゃうよ！戻ろう！」

「そ、そうですねっ！さっ戻りましょ！」

俺が察している事を察したのか、単に昼放課が縮まってしまう事を危惧したのか、大慌てな調子の及川さんと奴良くん。

二人は引きずるように清継くんを連れて行き、また家長さんも俺に

一礼した後その三人へと続いていった。

「今度はじっくりお話を聞かせてくださいねー！」

凄く面倒くさい後輩に目を付けられてしまったようだ。
だがまあ、面倒くさそうではあるが、オカルトのいるオカルト研究部は実に興味深くはあるし、今度行ってみることにしよう。

◇　◇　◇

屋上。
昼放課限定で一般生徒も利用可とされているが、今、人は俺しかない。
ただ単に人気が無いだとか、『馬鹿と煙は高い所に昇る』と言う格言で言うところの馬鹿が、この学校には俺しかいないという訳ではない。
理由としては俺が『”人払い”』と言う結界をこの屋上に張っており、陰陽師や人外でない限りはこの屋上に上がってくる事は出来なくなっているのだ。
”素人さん”を巻き込まないための当然の処置だ。

「遅刻だぞ早雲」

なんて不機嫌たらたらの調子で言ったのは、生徒落下防止の柵に腰掛ける人間化中の黒曜。
太陽の化身であるにも関わらず、今日も今日とて真っ黒だ。

「ああ、悪いな。少し厄介なのに絡まれてたんだ」

俺は黒曜の座る柵の向かいに設けられているベンチに腰掛け、弁当を広げる。
このボリュームで２５０円とは昨日はいい買い物をしたものだ。

「なに、遅刻料は唐揚げ一つで手を打とう」

俺の弁当に手を伸ばす黒曜。
それを弁当を下げ回避しようとする。

が、しかしそこは妖怪と人間。
遥に黒曜の方が行動が速く、ひょいと唐揚げを奪われてしまった。

「それ、共食いになるんじゃないか？」

言うと、そのまま唐揚げを口に運ぼうとしていた黒曜の手が止まる。
ジッとこちらを睨むように見据え、一息　はぁと溜息をつく。

「早雲、知らないのか？蜘蛛の子は親を食う。蟷螂の雌は雄を食う。
妖怪とて妖怪を食う。同種食らいを嫌悪しているのは人間だけだ。
どうしても必要であれば仕方の無い事なのだ」

そう言って俺の唐揚げを口に放る。
よほど美味しかったのか、にへっと口元を綻ばせた。
式や妖怪には食事は必要ない筈だが。

そんな黒曜をしり目に俺は俺で、唐揚げが四つから三つに減った弁当を食べ始める。

「さて、報告だ。お前の言うとおり、人気の無い所をずっと散策していたが、その妖怪は現れる気配すら見せなかったよ。完全な無駄足だったようだ」

もしかしたらと釣り糸を垂らしてみたがやはり駄目か。
と言う事はやっぱり夕方から深夜にかけての時間にやるしかないのか・・・・・。

「ああ、それと。どうも田舎くさい妖怪連中が上京してきているようだ。やけに殺気立っていたから警戒した方がいいぞ」

田舎くさい、と一体どう判断したのかわからないが、こいつがそう判断したという事はそう言う事なんだろう。

「例の妖怪同士の派閥争いか」

曰く、実は妖怪は独自のコミュニティを形成しているらしく、全国に様々な妖怪の派閥が作られているそうだ。

まあ、派閥が生まれて仲良くするのはいいことだが、妖怪は人間と同じように自我がある。
自我があれば好き嫌いが生まれ、ずっと、誰とでも、仲良く出来る筈もない。

卓上の小さな言い合いは、やがて戦場の殺し合いへと発展する。
派閥の衝突が起こるという訳だ。

「だろうな」

まあ、妖怪同士が殺し合う分は放って傍観しておけばいいが・・・・。

「人間も襲うんだろうなあ・・・・・・」

「畏れ、恐れられれば妖怪は強くなる。よって、より人を襲い、恐れられる事が派閥争いの勝敗要因になってくるからな。襲わない筈がない」

「遠路はるばる俺の所まで来て仕事を増やさないで欲しいものだ」

「お目当てはぬらリひょんだろうな」

ぬらりひょん。
昨日会った爺さんの妖怪名だそうだ。
かつては百鬼を束ね猛威を振るった大妖怪。

俺が昨日邂逅した感想としては、雰囲気こそ達人のそれだったが、果たしてこの爺さんはそれほど大きな脅威なのだろうかと疑問に思った。

「そいえばお前、ぬらりひょん達とやけに親しげだったな。なんかあったのか？」

昨日は修羅場真っ盛りで聞き損ねた事を改めて聞いてみる。
まあ、それほど深い関係と言う訳でもなさそうだが。

「何だ早雲？男の嫉妬は見苦しいぞ？」

にやにやとした口を中途半端に手で被い、俺をからかう黒曜。
何とも腹立たしいが、ここでつっこめばこいつの思うつぼである。

「単なる知的好奇心だ。深い意味は無い」

「心配せずとも私はお前一筋だからな。・・・・・・何時だったか、――――――そう、あれは４００年ほど前だ」

いきなり４００年ほど前と言われ、既においてけぼりなのは内緒である。
江戸時代かな　とかそんなレベルで思考を巡らせていたりする。

「私の町をうろちょろしている妖怪どもが居てな。その妖怪たちが目障りで、何の気なしに焼いてやったら、実はそいつ等はぬらりひょんの手下だったのだ」

こいつの言う『私の町』とは何処なのだろうか。
俺の式になる前の事を考えると・・・・奈良かな。

「そしてその手下の敵を討つべくして、百鬼を率い私の町に攻め入って来たのがぬらりひょんだったのさ。まあ、余裕で撃退したがな」

どう考えても全面的にこいつが悪いが、妖怪のであれ世の中は弱肉強食。
勝者である以上はこいつが正義だ。

「ふうん・・・・・」

そんな黒曜の無双記に味気のない相槌を打ちつつ、弁当に目を落とす。
・・・・・・あれ？

「どうした？そんな奇怪なものを見たような顔をして」

「黒曜、俺の唐揚げを知らないか？」

唐揚げ弁当から唐揚げが消えていた。
唐揚げだけ。

「さあ、知らないな。自分で食べたんじゃないのか？」

そんな筈は無いと黒曜へ食ってかかろうとし、気付く。

「その手に持っている者は何だ？」

「唐揚げだな」

堂々と、胸を張り言い放つ。
いや、そうじゃないだろ。そうじゃ、ないだろ

「それは俺の唐揚げだろう？」

「正確には『だった』だ。だが、今は私の手の中にあり、これは私のものだ」

おれの唐揚げたちを手に、
どや顔で超常理論を語る黒曜。

「いや、その唐揚げが無いと俺は沢庵をおかずに飯を食う破目になるんだ。返してくださいお願いします」

飽くまで下手に交渉する。
昼食の獲得のためだから俺、頑張ってるよ！
このバカに頭を下げるのはひさしぶりかもしれない

「仕方ないな。――――――ほえ（ほれ）。くえてやおう（くれてやろう）」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

自らが唐揚げの片側を口で咥え、こちらに顔を寄せる黒曜。
まるで親鳥が小鳥に餌付けをするかのように。
反応を楽しんでいるのか目も口もにやにやと笑っており、そこはかとなくイラッとくる。

――――――――もう、限界だよパトラッシュ

「『強制退場（レッドカード）』」

式符を片手に、そう唱える。
すると、一瞬にして黒曜は光に包まれ、その光に呑まれ消えた。
黒曜を吸収したその光は、生物的な不規則運動をしながら、俺の振った式符に吸い込まれた。
持ち主がいなくなり、重力に従って落下していた唐揚げを全て弁当のふたでキャッチし、俺は昼食を再開するのであった。

◇　◇

学校の終礼が鳴り、学校の終わりを告げる。
さっきまでの平々凡々とした日常は終わり、皆早々と帰宅していく。

理由は勿論例の通り魔。
日々増える犠牲者たち。その犠牲者たちの中には俺の知り合いもいた訳で・・・・。

明日のミスは許されないな。

「早雲。帰りましょ？」

一人皆の帰りを見届けながら、決意を固めていると声をかけられる。

「はっ？」

声の主を確認した瞬間、肺から空気の抜けたようなそんな声が出る。
まあ、居たのは皐だったのだが、何故いるのかがわからなかった。

「？」

◇

頭の上にはてなを浮かべる皐だが、俺の方がはてなで一杯だった。
だってよ、つい昨日まで関係が険悪だった奴が一緒に帰ろうとか言い出すんだぜ？

「ああ、まあそうだな。帰ろう」

何かを企んでいるのか。
それとも単に俺をちゃんと仲間として見るようになって、歩み寄って来ているのか。
まあ、ほぼ間違いなく後者だろうし、俺からも歩み寄ろう。一歩でも無駄にある二人の距離が縮まるように・・・・・。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

ゆったりとした歩調で自宅へ向かう

「それで、今日はどうするの？」

目の前の信号が赤になり、足を止める両人。
それを切っ掛けに、口を開いたのは皐。

「そうさな。とりあえず今日は夕方から深夜にかけての哨戒だけ。本格的にあの妖怪を仕留めに掛かるのは明日だ」

「――――――そう。わかったわ」

やけに素直な皐に、絶句する今日この頃。

「な、なによ」

「お前の事だから、今朝みたく今日滅すると言って聞かないのかと思っていたよ」

わりと、本気で思っていた。
こいつは以外と聞きわけの良い子なのかもしれないな。

「しょ、しょうがないでしょ。今朝は慌ててたのよ。それに、今はあなたを信じる他ないもの」

何時の間に俺はこんなに信頼を生んでいたんだろうか。
これが所謂カリスマと言う奴かっ！・・・・・・ないか。

「信頼には応えよう。これでも一心流の当主さまだ」

――――決行は明日。

――――皐の信頼に応えるために。

――――ゆらを救うために。

――――俺の日常を取り返すために。

確実に、滅してやるよ

六話　日常と非日常は紙一重（後書き）

Ｔｉｐｓ

”人払い”

結界の一種。囲んでおいた範囲内に人間を寄せ付けなくする。物理的な結界ではなく、全ての人間がなんとなくそこを避けるように行動するようになる、心理的な結界。

”素人さん”

陰陽師ではない人の総称。

基本的に全ての人間は等しく生まれつき霊力を備え持っており、理論上は陰陽術を扱う事が出来る。

よって誰しもが陰陽師と言えてしまう。だが、所詮理論は理論。何も教わらず使える訳もなく、力を持ってはいるが使えない存在。だから素人さん。

七話　妖を射んとせばまず街を射よ（前書き）

ちょっと今回は短かったり
感想まってます！

七話　妖を射んとせばまず街を射よ

――――――陰陽師対妖怪の戦闘において、最も重要である事柄は『如何に攻撃を当てるか』である。

何故なら、妖怪の俊敏性は常軌を逸しており、考えなしの直線攻撃ならまず当たらず、当然の事ながら、当たらぬならどんな高威力攻撃とて意味を成さないからである。

よって知恵ある者は『如何に攻撃を当てるか』に重きを置き、それを強さとする。

例えば、ゆらであるならば数多の式神を一斉に振るうその『手数』

皐であるなら超至近距離から振るわれる回避不可な程の『速さ』

竜二であるなら虚実を織り交ぜた言葉による相手の翻弄、言うなれば『策』

秋房であるなら周りから天才と謳われているのも納得がいくほどの『業（わざ）』

――――では早雲の強さとは何か。

◇　◇　◇

時は大きく流れ早朝。
日で言うなら早雲の作戦実行の日であり、ゆらのデッドライン。
そんな重大な日であるにも関わらず、テーブルを囲みゆったり朝食をとっている皐と早雲。

「――――――で、そろそろあなたのプランを聞きたいのだけれど」

そんな事を言ったのは、トーストにバターを塗る朝はパン派な皐。
早雲を信じるとは言ったものの、何の働きかけも見せない早雲に不安を持っての質問だ。

「随分と今更な質問だな」

呆れたような、人を馬鹿にしたような目配せ、口調で言うのは朝は白飯派だが朝起きたら既に自分の分もトーストが用意されていて、用意
された物を断る訳にもいかず仕方なくトーストをかじっている早雲。

「あなたが聞くたびにはぐらかしてるんでしょうが」

早雲のその馬鹿にした口調に皐はムッとして食って掛かる。
無理もない。相手を苛立たせることに関しては、花開院早雲のそれはまさに天性の才能だったのだ。

「ああ、言われてみればそうだったかな。・・・・まあ、お前に策を早期に話す必要性を感じなかったし、しょうがないだろう」

『仕事』において早雲は無駄な説明を極力省く。
それは、早雲の布く策が常人の理解を大きく超えており、納得させるのが面倒くさいという理由から成っている。

「・・・・・そうね。でも、そろそろ話してくれてもいいんじゃない？」

早雲の言葉は少し癪に障ったものの、一々食って掛かっていては話が進まない。
というか、早雲に戦力外として認識されていた事が、浅くながら心に突きささる皐であった。

「そ、そうだな。よし、話そうか。実践しながらになるが」

早雲の言葉に水をかぶった様にしゅんとした皐。
それに少なからぬ罪悪感を覚えた早雲は元気づけるように言葉を発した。

「とりあえずまずはゆらを学校へ運ぶぞ」

◇　　◇　　◇

寝込んでいるゆらを自宅マンションの大駐車場へ背負い運び出す早雲とそれに続く皐。
もしこの場が第三者に見られでもしたらあらぬ誤解をされ、通報、職質されていた事だろう。

「まあ、ここら辺でいいだろう」

足を止め、周りを確認する早雲。
どう見ても犯罪者の所業である。

「ここら辺って・・・・学校に運ぶんじゃなかったの？」

そう疑問をぶつける皐をしり目に、早雲は懐から袋状の何かを取り出し、その袋の中身を探り始める。
それは早雲の背中に乗る少女、花開院ゆらの財布だった。

「レシートばっかじゃねえか・・・・・そんなんだからお前は・・・・・ていうか処理に困るなら元々貰うなよ・・・・・」

なんて愚痴りながら財布を探る早雲。
どう見ても変人です。

「あ、あった」

早雲が手に取ったのは式符。

「それ、ゆらのでしょ。使えるの？」

「道具のこいつらに、使用者を選ぶ意思は無い。――――――現にホラ、『禄存（ろくそん）』」

瞬間、早雲の持つ式符から煙が現れ、その中より『鹿』が現れた。
その鹿、『禄存』は立ち尽くし呼び出した主の命令を待っている。

「面倒事ですまないが、ゆらを学校の屋上へ運んでくれ」

式神の意思に絶対に否定は無い。
それが如何に面倒でも、それが如何に危険でも。

「じゃあ、頼んだぞ」

背中にゆらを乗せた禄存は学校へ向け走り行く。
――――――それを、見送る早雲は何とも言えないような表情をしていた。

「いいの？こんな真昼間からあんな目立つ式神使って」

少しうわの空な調子だった早雲を、言葉にて現実に引き戻す皐。

陰陽師というのは忍ばなくてはならない。
『絶対』とまでは言わないが、忍ばなくてはいけない。
理由はいろいろあるが、一般人を巻き込まないため　というのが主だ。

だから基本的に昼間に術を使うのは暗黙の了解でタブーとされている。

「人払いを張ってあるから問題ない」

「人払い？何時の間に。ていうか何処に？」

「それも含めてあとで話す。とりあえず次は学校へ行く」

そう端的に告げ、駐車場から歩きだす早雲に、皐は黙って付いていく他なかった。

◇　◇　◇

「臨時休校・・・・・？」

呟いたのは皐。

彼女らの通う、浮世絵中学校。
曜日で言うのなら今日は金曜で学校があった筈なのだが、校門は閉ざされている。
その校門には『臨時休校のお知らせ』という張り紙が貼られていた。
突然の休校であるにも拘らず、登校者は〇。
しかも職員すら見当たらないと言うミステリー。

「そのようだな。ほら、行くぞ」

『そんなの興味ないね！』といった調子で張り紙を一瞥し、校門を跨ぎ、越える早雲。
色々突っ込みたい事はあったもののそれは置いておき、置いていかれまいと皐が校門を越えようとしたところで――――

「ちょっ、早雲先輩何やってるんですかっ！？」

良識人から声がかかった。

早雲を知る人物で、後輩なやつは数少ない。
そう、昨日会った数人の男女。それ以外にその呼称で呼ぶ者はいない。

声色からするに男子。
・良識人
・早雲を知る後輩
・男子

即座に早雲は思い当たり、それが誰かを認識する。

「奴良くんか」

早雲が振りかえるとそこには――――
当惑の表情を浮かべる『ぬらりひょんの孫』と、何故か敵意を剥き出しにしている『その側近』が居た。

「そういえば君は前もジャージ姿だったな。何でジャージを着ているんだ？運動部か何か？」

適当な話題を引っ張りだし、やり取りの間に適当な『自分が学校に侵入している訳』を考える早雲。

「えっ？いや、そう言う訳じゃないですけど・・・。動きにくいじゃないですか。制服って」

「ああね。わかるわかる。学ランは肩が張るからストレート出しにくいよな。ストレートが出来ないのは決め手に欠けるから結構痛手さね」

シュッシュとシャドーボクシングをして見せる早雲。

「えっ？」

言わば当惑。
歯の間に何かが引っ掛かった、そんなような顔をする『孫』

「えっ？」

何が疑問なのかわからず聞き返す早雲。

流れるは気まずい沈黙。

「・・・・何をしているか、だったね。見てわからない？」

言い得て妙、閑話休題。

「わからないか。ならば教えてやろう。――――――忘れ物をとりに行くのだ」

数秒の沈黙の間に考え着き言った嘘。
早雲自身、これは苦しいなと思った嘘だった。
現に、『孫』の顔はだんだんと疑念で曇っていっている。

「・・・・・じ、実は忘れたのは弁当箱でな。早いうちに回収しないと腐敗が進んで大変な事になるんだ」

脳は巡る巡る。
より信じさせやすい、嘘を吐くために。

「ほら、早雲。早く行くわよ。あんたの忘れものの為に私まで付き合ってるんだから」

早雲の苦しい嘘に呆れ、助け船を出す皐。
証言者が二人いるのなら、如何に胡散臭かろうとそれを一概に嘘であると切り捨てる事は出来ない。

「そうだな！急ごう」

前を行く皐に追いつくよう小走りで駆ける早雲。
彼らの言葉を嘘であると決めつける事が出来ない以上、彼らを呼びとめる理由は無く、ただただ2人の背中を見送るだけだった。

――――――――――浮世絵中学校屋上。
ほど良く高い中学校という建物は、周りを見渡す事に関してとても優れた建物である。

「なに、これ」

屋上に上がり、周囲を見渡した皐は驚嘆の声をあげる。
そこに広がるのは街並み。その光景は普通ではなかった。
その街並みには根本的に足りない物があった。
――――――人がいない。
大通り、小道、車道、歩道。
どの道、どの通りにも人がいなかった。

そして、この光景が『普通ではない』と認識させるもう一つの大きな要因。
この街を囲う、『青白い膜の様な何か』
それには皐に心当たりがあった。
けれど、あり得なかった。少なからず、自身の常識では。

「結界・・・・？」

「その通り。――――名付けて『”六〇式自動妖怪探知呪縛機能付き人払い大結界”』だ」

やたら長い名前をつらつらと唱え、どや顔をかます早雲。
そんな早雲を無視し思考を走らせ始める皐。

「やっぱり、あり得ないわ。こんなの、聞いた事ない」

こうまで皐が驚くには訳がある。
『この規模の結界』を張るには本来なら１００人近い人数の陰陽師を用意してやっと張れて、張れたとしても維持は数十分が限界なのだ。
――――――それをこの男は一体、一人で、どれだけの時間維持している？

人払いが効果を表すまでの時間は、術の規模に比例する。
術の規模が大きければ大きいほど、人がその範囲内から出るまでに時間がかかり、それ即ち効果が表れるまで時間がかかるという事になる。

この規模の人払いならば効果を表すのに最低でも二時間は必要。
現時点で既に完全に人払いが機能していると言う事は『二時間以上前からこの結界を張っていた』という事になる。

「ま、目に見えてるものが事実だよ。・・・・・・さて、はじめようか。――――――妖怪狩りを」

――――――早雲の強さとはその術のいろいろとぶっ飛んだ『規模』だった。

七話　妖を射んとせばまず街を射よ（後書き）

Ｔｉｐｓ

”六〇式自動妖怪探知呪縛機能付き人払い大結界”

機能をそのまま書いた術。

因みに六〇式と言うのは、その結界を張るのに使用した札の数。

八話　立つ鳥（とり）塵も残さず。（前書き）

因みにいつぞやに貼り紙貼りで貼っていた貼り紙は実はこの術発動の為のお札だったりする。

感想待ってます！

八話　立つ鳥（とり）塵も残さず。

人に悪なす妖怪は兎も角として、人に善なす妖怪もいるにも関わらず、花開院家は「妖怪は総じて滅する」と言う方針を執っている。
それに深い理由は無い。単純に妖怪が『恐い』のである。
善妖怪、悪妖怪に関わらず『妖怪』であればその力と知恵は人間の比ではなく、人間より圧倒的上位な存在だ。

陰陽師達はその力が恐いのだ。
もしかしたら善き妖怪が心変わりして人を襲い始めるかもしれない。
その万が一を回避するために総じて滅する。

妖怪たちが『そこに存在するうえでのメリット』と『そこに存在するうえでのデメリット』
それを計りにかけ結果的に『デメリット』の方が多かったってだけの話。

そこに善も悪も無い。
物量的に考えてこっちの方が『損をしない』選択なだけだ。

――――――――――――――――――――――――――――――

街は人のいないゴーストタウン。
皐は何故かうわの空。
ゆらは件の呪いで瀕死。
そして俺は――――

「『日暮れ待ちなう』　っと」

一人静かにつぶやいていた。

「おい、妖怪狩りとやらをするのではなかったのか？」

俺の目の前の中空を浮かぶ、俺の式の黒曜は言う。
どうでもいい事だが、黒曜には一対の大きな羽が背中に生えているのにも関わらず、その翼をはためかせ空を飛ぶのではなく、”浮遊の術”を使って空に浮かんでいる。
別にそれがいけない事だとは言わないが、そうされると俺の中には「その翼は一体何の為に付いているんだろう」と言う疑問が付いて離れなくなってしまうわけで。
学校での授業中、その事ばかりを考え詰め、授業は頭に入らずテスト点は落ちる。
つまるところ前回の数学と科学のテストが平均点の半分も満たなかったのはこいつのせいであると言えよう。
決して俺が勉強を怠った訳ではない。

「あらぬ罪をなすりつけられている気がするな」

「・・・・・気のせいだろ。それと、妖怪狩りは日暮れ待ちな。あいつが出てこないんじゃ始まりさえしない」

黒曜の勘が鋭いのはいつもの事なので多少思考が読まれた位では驚かないようになった今日この頃。
いや、でもやっぱり慣れないものは慣れないな。

「数分前は今から始める感じで言っていたような気がするが」

「・・・・・気のせいだろ」

決して気乗りしすぎて出現時間が頭から抜けていた訳ではない。
そんな事あるわけないだろ。俺はプロの陰陽師だぜ？

「そう言うのならそう言う事にしておいてやろう」

「早雲」

俺のぶっきら棒な答えにどこか納得した風の黒曜は、ところでと話を区切り俺の名を呼ぶ。
名を呼ぶが早いか、黒曜は中空より俺の前に降り立ち、笑みを浮かべる。
万人を魅了するであろうその笑顔に、こいつの内面を知る俺は背筋が凍るような底知れぬ恐怖を感じた訳で。

「な、なんだよ」

ほんの少し。ほんの少しだけビビってしまう。
こいつの笑顔って恐いな・・・。

「なに、提案があってな」

「提案？お前が？俺にか」

珍しい。
いつもは仕事に関して一切の口出しをしないのに。

「ああ、夕方まで退屈なのは嫌なのでな。少し精力的に協力してさっさと片付けてやろうと思ったのだ」

「それは助かるね。だがあの妖怪は夕方まで絶対出てこんぞ。そう言う妖怪だしな」

「要するに、日を向こうに傾ければいいのだろう？」

東の空に燦々と輝く太陽を指さし、そして日の沈む西へ指を動かし

ながら言う黒曜。
何を言っているんだろうかこいつは

「お前が太陽を動かすと？」

「ああ。太陽の化身だからな。日没を速める程度、造作もない」

いやいやいやいや。
物理的に無理だから。太陽系の公転とか地球の自転とかあんだろ。
宇宙を術で動かす気かこいつは。
いくら大妖怪の中の大妖怪なこいつだって限度ってものがある。

「太陽の化身だから出来るって・・・・そのこじ付けは無理があるだろ」

「私とは太陽であり太陽とは私である。少し私を動かすのだから無理ではない。ちょっとした運動だと思えばいい」

そもそもこいつは肝心なところで勘違いを起こしている。
いや、勘違いと言うよりは時代錯誤やアナクロニズムか。
こいつは太陽を動きを早めるのは造作ないと言ったが、残念ながら太陽はそもそも動いていない。動いているのは地球だ。

地動説と天動説。そこら辺の考え方から黒曜と俺とでは違っていると言う事か。
だから太陽を動かせば日没が早まるなんて言う単純な話ではないのだが――――

「止めるだけ無駄か」

やたらやる気になっている黒曜を止める元気は俺にはなく、とりあえず黒曜には現実を知って絶望してもらう事にした。
と言うか本当にこいつが太陽動かしたら、太陽系とか狂いに狂って地球滅亡の危機に瀕するんじゃなかろうか。

・・・・・・本当に出来たらどうしよう。ちょっと不安になって来た。

「どうやら私の事を信用していないようだな。・・・・・まあ、いいか。あとでお前の驚いた顔を見るのも悪くない」

言って、ふうと一息。

黒曜の両の大翼がはためき、風を巻き上げる。
その送風を合図に、黒曜の足元に円状に書かれた”烏文字”が現れた。
なんて書いてあるのかはわからない。
その烏文字の円は、不燃物を燃やした時に出てくるような不健康色

の黒煙を噴きだす。
噴出された黒煙は天へと昇り、広がり、どういう訳か、読んで字の如く空を覆った。
黒煙は光を遮り、日中は日の光が唯一の光源である人の街は、一瞬にして闇に染まる。

「ちょっ、今度は何よ！？」

皐が驚嘆の声をあげる。
真っ暗なので姿は見えない。だいたいあそこら辺に居るんだろうなー程度の位置把握。

「では、いくぞ」

そう端的に告げる黒曜。
声のした、黒曜のいるであろう位置に突然、光源が現れた。
光源は黒曜が右手に持つ燃え盛る槍だった。
曰く三又矛『”三本脚”』
その光源で照らされ、だいたいではあるが皐や黒曜が何をしているかわかる。
皐は急に灯りがともりビックリしたのか黒曜を凝視していて、黒曜は三本脚を空へと投げ放とうと投擲体勢をとっている。

「何を――――――」

しようとしている？
と黒曜に聞こうと思ったがその言葉は飲み込んだ。

三本脚を投げ放つ黒曜。
放たれた三本脚は高速で天を目指す。さながらミサイルと言ったところか。

黒曜の放ったミサイルが天へ届くかどうかと言う高さまで達したところで、空の『何か』にヒビが入った。
そのヒビから陽光が漏れているのを視認して、そこでその『何か』が黒煙の膜だったと言う事に気付く。

黒煙の膜はヒビの入ったところから崩れ落ち、やがて全て瓦解した。
あったのはさっきと何も変わらぬ街風景――――――――――――――の筈だった。

「だいぶ驚いて貰えたようだな。ふふっ、少し演出に手間を加えた甲斐があったものだ」

誇張で胸を張る黒曜をしり目に空を見やる。
さっきまで確実に日は昇っている位置だった筈だ。
・・・・・だが今は沈みかけ。

待て待て待て。
一体何が起こってる
ポケットより携帯を取り出し時刻を確認する。
「・・・・・・？？」
携帯備え付きのデジタル時計には八時半としっかり表示されていた。
無論２４時間勘定で０８時である。要するに早朝。
その早朝に――――――日が沈みかけていた。
「だから言っただろう？私は太陽で太陽とは私であると」
そうやってどや顔で語る黒曜に、真剣に思い悩んでいる自分が馬鹿らしく思えてきた。
公転とか自転とか、そう言う事を考えるのはやめよう。間違いなく永遠に答えはでない。
妖怪なんてそんなもんだ。
そう心に言い聞かせる。
「まあ、いいか。じゃ、黒曜。作戦通り妖怪の殺戮は頼むぞ」

「ああ、任せるがいい」

言って、この場より飛び立つ黒曜。
どうでもいいが例の如く翼は使っていない。・・・・術とかの時にだけ使う翼なのかなあれ。

「それで、これからどうするの？」

言ったのはやや疲れ顔の皐さん。
色々突っ込みたい事がありそうな顔をしているが、突っ込まないのは職業病か。
『原理なんてわからなくても気にしない』みたいな超常的スルースキルを持っていないとこの職業はやってられないし。

「そうだな。作戦には三つのプロセスがある。まず一つ、この結界によって妖気を少しでも露呈した妖怪を自動で探知、呪縛する。二つ、探知と呪縛が発生した地点を俺の式へ念で通達。三つ、焼く。――――――とまあこの三つだ」

我ながら実にわかりやすい説明だったと思う。
そんな俺の説明を理解できなかったのか、首をかしげ皐は訪ねる。

「ちょっと待って。この結界は人払いなのよね？だったら『襲われ

る人』がいないんじゃない？襲われる人がいないんじゃ、妖怪は妖気を表に出さないわ」

「何、案ずるな。確かに人はいない。けれど人に化けた妖怪はいる。それに加え俺の式も人に化けさせて街に放っている」

街に放ったのは五鬼。
因みにあいつ等は人化で学ラン丸坊主の野球少年ズになっている。見た目こそうり二つ・・・いやうり五つだがよく見ると、学ランの中に着ているTシャツの色が鬼の時の肌の色と対応しているので見分けはつく。

干瓢ならば紫のTシャツ。湯呑ならば青の・・・・と言った調子で。・・・・・凄くどうでもいいな

「うちの式はかなり暴れん坊でその上見境なしでな。人を払ったのはそう言う理由があったりする」

黒曜を使う場合は人を払っておかいないと数人は巻き添えを食らうからな。

「ふうん。あなたの式神ってあの黒いのでしょ？」

皐は街の中心で浮いている黒曜に一瞥を投げる。

「ああ、そうだ。黒曜って言う」

『なんだ』

突然の黒曜からの念による呼びかけ。
名前を口に出しはしたが
呼んでねーよ！

『呼んでねーよ！』

『・・・・そうか』

ていうかどんだけ地獄耳なんだよ・・・・。
ビックリだわ。２００ｍは離れてるだろコレ。

「結構変わった式神よね。私はあんまり式神の事詳しくないからわからないけど、ゆらの式神とはだいぶ違って見えるわ」

『あんなただの道具と化した奴等とは一緒にして欲しくないな』

また飛んで来た黒曜による念。
黒曜はばっちり会話に参加する気らしい。
皐には聞こえていないし、一々返事するのも面倒なので無視する事にしよう。
そのうち飽きるだろ。

「まあ、うちの式神とゆらの式神はシステムが違うからな」

「システム？」

ちょっとだけ説明しておこう。

まず式神には二種類の存在がいる。
一つ目は『妖怪式神』。妖怪と陰陽師とが契約しその妖怪を陰陽師が以後式神として従える式神術。利点は手軽である事。俺とゆらの式神はこれにあたる。
二つ目は『創造式神』。これは呼んで時の如く一から作りだす式神。プログラムとかそう言った感じなんだろうかね。利点は妖怪式神とは違いベースとなる妖怪がいないので臨機応変自由自在の式神を作り出す事が出来る事。だろうか。

さて次には妖怪式神についてだな。
妖怪式神を作る過程。まあ妖怪と契約する過程で三つの通過儀礼が必要になる。

一、妖怪の名を奪う。陰陽師や妖怪の世界において名とは体であり、体とは名である。名を奪われた妖怪は自我を無くし『妖怪の力』を無くす。
妖怪が裏切らないようにと言う保険でこれを最初に行う訳だ。

二、妖怪に名を付ける。名とは体であり（以下略）名を付け『陰陽師の式神としての力』を元妖怪に与える。これでほとんど式神になったも同然だ。

三、契約。契約の仕方は様々あるが式神に自分の名前を紙に書いて貰い、それを以後式符として扱うのが一般的だ。

長々と思考の中で説明したが、俺の式神とゆらの式神の違いに気付いて貰えただろうか。

「ま、気にするな。小さな違いさ」

そう、ささいな違い。
それがあるか、ないかの違い。

◇　◇　◇

現在午前9時を回ったところ。

日の位置だけずらしてもしょうがないのだろうか。
となるとあと１０時間ぐらいは待ちぼうけかな・・・・・。
あー暇だ。何かしら娯楽もってくるべきだったな。

「――――――――！！」

ぼんやり思考に耽っていると突然皐の顔が強張った。
瞬間、結界が作動し妖怪を捉え、捕えた。
どうやらお出でなすったらしい。

『早雲、引っ掛かったぜ！口が裂けてて白いワンピースの女！』

念を飛ばしてきたのは野球少年ズの一匹、紫Ｔシャツの干瓢だ。

『グッジョブだ干瓢。今度干瓢おごってやるよ』

『いや、俺干瓢だけど干瓢が好きって訳じゃねーし！オメーの勝手なネーミングだろうが！』

そんなやり取りの片手間に黒曜に指示を出す。

『そっちに黒曜を送ったぞ。俺の術から逃げられるとは思わないが一応見張っておいてくれ』

『えっ、はっ！？黒曜ねーさん来んの！？おい、ちょっと待て。聞いてないぞそんな事！』

まあ、言ってないしな。

空を飛ぶ黒曜は既に俺の示したポイントまで移動していて、何やら霊力を溜めている。
大技で決める気らしい。
と言うかその霊力は俺持ちだから無駄遣いはやめてほしいのだが。
まあ、たぶんやめてと言ってもやめないだろうしなー・・・。

『だってお前ら、言ったら断るだろ』

『断るに決まってるだろ！俺達が何度敵と一緒に巻き添えで焼かれたと思って――――――』

不自然に言葉が途切れる干瓢。
どうやら『何か』が見えたらしい。
言うなれば『回避できぬ絶望』的な何かが。

『・・・・・・早雲。故郷の家族には、俺は最後まで勇敢に戦って、そして散っていったと伝えてほしい・・・・』

言うが早いか、街の一角に特大の火柱が立ち昇る。

「「「「「カンピョォォォォォォッッ！！！」」」」」

野球少年の格好をした鬼たちの無念の叫びが、人の居ぬ街に木霊した。

「安らかに眠れ、干瓢よ。・・・・南無」

両の手を合わせ、立ち昇る火柱に一礼する。

・・・・お前の犠牲は無駄にしない。

「早雲、ゆらの呪いが解けて持ち直し始めてるわ。ちゃんと滅せたみたいね」

「当然だ」

こうして、江戸に来て一件目の妖怪退治は、一匹の尊い犠牲を払い、無事幕を閉じた。

八話　立つ烏（とり）塵も残さず。（後書き）

Ｔｉｐｓ

”浮遊の術”
無謀にも万有引力に喧嘩を挑んでいる術。
原理は不明だがばっちり成立している。

”烏文字”
黒曜が術を扱う時に使用している一見日本語のようでよく見ると違う言語。
『黒曜語』とも言う

”三本脚”
黒曜の愛用の三又矛。
妖怪を一瞬で灰にする極熱にも耐える超耐火性能を誇っている。

早雲曰く、「あれ原料で宇宙船作ったら太陽探査も夢じゃないな。
某航空宇宙局にでも売ってみるか」

九話　能ある怠け者は爪を隠す（前書き）

どうでもいい話
黒曜が傾けた日は、調整の為に日の傾き具合に見合った時間になるまで動きを止めています。
つまり、この日８：３０～１８：００ぐらいまで、一切日の動きがないと言う凄い不思議現象が地球規模で起こっています。

感想待ってます！

九話　能ある怠け者は爪を隠す

――――――メガテリウム。

今から約１６４万年ほど前。人類が誕生するより遥か昔。
その頃に大陸の覇者となっていたモノの名前。

南アフリカに生息し全長は大きいもので８ｍ。体重は３ｔ。
四本の足には長き鉤爪があり、太い尾を持っていたそうだ。

二足で立つ姿はまさに怪獣。
その姿に見合う力を持ち、１６０万年、大地の覇者として君臨し続けていたそうな。
尤も、残念ながら彼らは人類が誕生する前に絶滅してしまったようだが。

そんなメガテリウム。彼には別称がある。

『最強のナマケモノ』
それが彼の別称。

怠けながらにして最強。
万人に自身の命を脅かす事は出来ず、自分は平和に生きて行く。
それがメガテリウムであり、そして、――――――俺の夢だ。

だが、俺には『力』が無い。
大地の覇者として君臨する力は勿論の事、自分一人守れる力があるかすら怪しい。

だから、別の事で補う。
メガテリウムに無い、けれど人類にある『知恵』と言う特権を使い、危険を回避しより安全な、或いは楽な道を考える。

『石橋を叩いて渡る』

・・・・甘いな。落ちる可能性のある橋なら渡らなければいい。

『石橋を渡るより迂回路』

それが俺の人生観

―――――――

死の淵より蘇ったゆらも含め、俺達陰陽師ズは夕食を食べていた。
因みに夕食を作ったのは皐なのだが、心なしか夕食が豪華なように思える。

・・・・・・いや、『心なしか』で済まされるレベルではないかもしれない。
食べたことはおろか、見た事すらないけれど、中華の『満漢全席』なフルコースクラスぐらいあるのではないだろうか。

「いくらなんでも多くないか？」

出てくる料理こそ『からあげ』や『卵焼き』と言った庶民的である

ものの、量が多い。
どんな住人が、何人来てもある程度は受け入れられるように、うちの家具は基本的に大きい。
例にもれずこの夕食が乗っている木の長机もかなりの大きさだが、机の木で出来た表面の部分が一切見えないほどに、皿で埋め尽くされていた。
パーティ開けるぞこれ。

「あなたが買ってきた食材のほとんどが賞味期限昨日だったのよ。だから全部使ったの」

「・・・・・申し訳ない限りだ」

賞味期限。
そんな面倒なルールが世界にはあったな。
あんまり味落ちとか気にしない人だから、そう言うの気を付けないんだよなー俺。
腐ってても気にせず食べるし。

「なあ、早雲義兄(にい)」

そんな、疑問たらたらな口調で声をあげたのはゆら。

どうでもいい事だが彼女の口の端から涎の様なものが垣間見えている。どんだけ餓えているんだ・・・。
ああ、そういえば三日食べていないのか

「なんだ、ゆら義妹(いも)」

「・・・・里芋みたいに呼ばんといて」

「いや、でもホラ。里芋は煮ると美味いし、誇っていいと思うぜ？」

「た、確かに里芋は煮ると美味いな・・・・・うん。――――――いやいやいや！うちは里芋の話がしたいんと違うし！」

そんなノリ突っ込みをかます女子中学生。
つい先日まで生死の境でジャグリングしながら綱渡りしていたとは思えない元気さである。

「じゃあ何だと言うんだゆら芋よ」

「あんな、うち、ここ数日の記憶がぽっかり抜けてるんやけど・・・・」

死にかけていたゆら。
ついさっき目を覚ました訳だが経過の説明を一切しないままに現在に至っている。
主に、面倒くさいから。

「知らねーよ。変なものでも拾い食いして記憶が飛んだんじゃねえのか？」

ゆらならあながちあり得なくもないから困る。
まあ、俺もわりとそう言う事に近しい出来事がたまにある人間だから、一方的に笑ったり責めたり出来んがな。

「拾い食いなんてしんわ！早雲義兄はうちの事なんやと思ってんねん！？」

「食欲に足が生えて歩いている的な何かかと思っていたよ」

ゆらは拾い食いをしないらしい。俺が見ないうちにだいぶ世間に馴染んでいっていたようだ。
これは認識を改めなければならないか。

「はぁ・・・・。意地悪しないで教えてあげればいいじゃない」

ゆらへ救いの手を差しのべたのは皐。
しかし、誰かを味方すると言う事は、違う誰かと敵する言う事である。
今で言うならば俺に。

「なんや、早雲義兄知っとったんかいな！」

ぐいと俺に迫るゆら。
上手く話を逸らしていっていたと言うのに、見事にその努力は皐の一言で無に帰ってしまった。

「いや、だって教えるっつったってなあ・・・・」

どこから話すべきかわからないし、面倒くさいし。
ちらり皐を垣間見るも、どうやらこいつはゆらに味方する所存らしい。
女と言う生き物は、たまに変なところで変なコンビネーションを見せるから困る。

「あー、わーったよ。説明するよ、すりゃいんだろ。お前の数日間分の記憶が無い理由は、お前が妖怪にやられて寝込んでいたからだ」

「うちが妖怪に？」

確認の質問を何故か皐に投げかける。
そんなに俺が信じられないのか。ていうか信じられないなら最初から皐に聞けよ。なんなんだこの二度手間は。

「ええ、そうよ。ええと、その時に一緒に居た子がいたわね。確か名前は・・・・・「家長さん、な」」

思考を巡らす皐の口から、家長さんの名前が出てくる気配が一切なかったのでフォローした。
俺はあの後、何回か機会があり顔を合わせたので忘れてはいないが、皐はたぶんあれっきりで会っていないので忘れるのも仕方がない。
色々立て込んでもいたし。

「ああっ、ああ！」

曖昧だった記憶に鮮明な色が付いたのか、声をあげた後に納得顔になるゆら。

「それで、皐義姉（ねえ）が助けてくれたんやな」

まさにこの一言が俺とゆらの信頼関係を具現としている。
皐が頑張ったと言うのは事実だし、皐の人柄上そう思うのも無理は無い。だからそれはいいんだ。
だが、俺が一切関わっていないと思うのはどうなんだろうか。

「そんなとこだな」

しかしまあ、それでいい。
失っているものは大きいが、変わりに得ているものもまた大きいから。
この信用の無さこそが俺であり、こんな俺だからこそ危険な仕事が回ってこないのだ。

「――――えっ？」

虚をつかれたような、そんな声をあげたのは皐。
顔を見ると何か言いたげな顔をしている。何だろうか。

・・・・まあ、なんとなく予想は出来る。
『どういうつもりだ』とかそんなところだろう。

「さ、話は一段落したし食おうぜ。冷めちまう」

そんな皐をさも気付いていない感じで無視する。

だって、なんて聞かれるか何となくながらわかってるしな。

――――――――――――――――

皐の刺すような視線を回避しながら夕食を食べ、片付け、現在食後である。
色々疲れた体を押し自室へ戻る。

自室にはクローゼット、ベッド、携帯の充電器と本当に必要最低限のものしか置いていない。
恐ろしく、生活感の無い部屋だ。

「ふーっ」

ベッドへとダイブし息を吐く。
安物のベッドな為、ベッド内部のばねが衝撃吸収をしてくれず、結構痛かった。

それにしても疲れた。
久々にあんな大きめの結界張ったからなあ・・・・。
八咫烏を滅そうとした時以来ではなかろうか。
あんな強力な結界を張ったのは。

少し、ほんの少し　女の子に・・・・いや、人に頼られて嬉しかっ

たのかもしれないな。
それにしても、後先考えずに霊力を使いすぎた。肩から腰にかけてドッと疲れが来てる。

「寝るか」

時刻はだいたい２０時ぐらい。
少し早い気もするが、これ位に寝ておかないと明日に支障が出そうだ。

コンコン

ドアが鳴る。来客のようだ
皐かゆらか。まあ、わかるけど。

「どうぞ」

キィ　と木の扉特有の開閉音を立て扉は開く。
入って来たのは皐だ。いささか、いつもより不機嫌なように見える
寝っ転がって客人をむかえると言うのは、ばっちり無礼なので起き上がりベッドに座る。

「・・・・・私がなんでここに来たのかわかる？」

開口一番に難題を投げる皐。

「しらねーよ」

なんでお前は俺にそれがわかると思ったのか。
それが俺は不思議でならない。

「あれは一体どういうつもり？」

瞬間、首筋に冷たい感触が伝わる。

首に当たっていたのは皐の愛刀の月不見月。
無論、当たっているのは刀の背、峰（みね）だ。

いつの間にやら抜いていて、いつの間にやら向けられていたらしい。
相変わらずの人外じみた速さだこと。
ていうか、入った時はもってなかった筈だが・・・・・どこから出したんだよ。

「あれ　と言われても困る」

「ゆらを助けたのは一から十まであなただった。けれどあなたは、ゆらの『私が助けた』と言う勘違いを正そうとしなかった。肯定した。あれはどういうつもりだと聞いているの。私への同情？情け？それとも手柄を譲ったつもり？もしそうなら、ハッキリ言って要らない世話だし迷惑よ」

その言葉の雨に気圧され、座りながら後退し、背中に当たった壁の感触で、もう逃げ場が無い事を悟る。

「・・・・自意識過剰だな。残念ながら全部外れだ。俺には俺の考えや理由があってああしたんだよ。お前の為なんかじゃない」

「考えや理由？」

「話す気はねえよ」

双方の睨みあい。

「・・・・・そう、ならいいわ。それと、私の勘違いだったみたいね。――――ごめんなさい」

長く続きそうだなと思っていたが、皐が刀を鞘へ納め案外早く事態は収拾した。

俺の誠実な目をみて嘘ではないと読みとったか。

「構やしねえよ。そう言う事ばっかしてっからだろうな。疑われるのにも、勘違いされるのにも慣れてる」

手柄を人に押しつけて、どういうつもりだと問いただされるのは今に始まった事ではない。
まあ、それで刀を向けられたのは初めてで少し焦ったが。

「早雲・・・・・・・」

なんとも言えない気まずい空気が流れる。

「俺はもう寝るから、他に何かあるなら明日にしてくれ」

「・・・・わかった。おやすみなさい」

「ああ、おやすみ」

律義に電気を消し立ち去った皐をしり目に、俺は寝転がり夢の世界へと旅立った。

九話　能ある怠け者は爪を隠す（後書き）

次回から四国編
長かった！凄く長かった！

十話　獲らぬ狸は今日牙をむく（前書き）

～京妖怪、奴良組、花開院の大まかな実力表～
上にいくほど強く、下に行くほど弱い。
あくまで一対一、公平な状況で戦えば　の話ではありますが。
１００％独自解釈です。ご注意を

上

【甲】土蜘蛛（無所属）≧ぬらりひょん（奴良組）
【乙】八咫烏（無所属）＞茨木童子（京妖怪）≧鬼童丸（京妖怪）
【丙】羽衣狐（京妖怪）＞奴良鯉伴（奴良組）＞牛鬼（奴良組）＞１４代目秀元（花開院）

下

【甲】猩影（奴良組）≧黒田坊（奴良組）＝青田坊（奴良組）＝河童（奴良組）≧首無（奴良組）≧黒曜（式神）＞毛倡妓（奴良組）＞（その他京妖怪の平均）
【乙】秋房（花開院）≧竜二（花開院）＞奴良くん（奴良組）＞五鬼（式神）＞皐（花開院）≧ゆら（花開院）＞（その他奴良組妖怪の平均）
【丙】（その他花開院家陰陽師の平均）

皐「こうして見るとどれだけ陰陽師が妖怪に劣っているかよくわかるわね」

ゆら「悔しいけど事実やからなぁ・・・・」

早雲「・・・・おい、おかしいぞ。俺がいない」

黒曜「よく見ろ。一番下にいるじゃないか」

早雲「やっぱあれなのかー・・・。『平均』でひとくくりにされてる主人公ってどうなの」

十話　獲らぬ狸は今日牙をむく

俺達陰陽師の性質は人間と言うより妖怪のそれに近い。
生命力や身体能力は完全に人間から逸脱しているし、物事の考え方まで平均的な人間から見れば俺達は外れている。

俺達の生命力を例えるなら『ＲＰＧのキャラクター』が一番適切な例えだと思う。
ＲＰＧのキャラクターはゲーム上のキャラクターであるから『死なない以上は支障なく行動できる』。
ＨＰが１であろうと生きている以上は攻撃できるし、行動にほとんどの支障がない。
それと、俺達は一緒なのだ。
霊力という摩訶不思議な力により、足が落されようと歩ける。腕がもがれようが物を持てる。
『ＲＰＧのキャラクター的生命力』まさに妖怪的だと思う。

そんな逸脱した俺達が掲げる正義。
――――――『妖怪は悪であり、陰陽師こそ正義である』
それは『陰陽師から見て妖怪』が『絶対的強者』だからこそ掲げた正義で、俺はそれが間違っているとは思っていない。
誰でも『自分より圧倒的に強い存在』というのは恐いものだし、殺すことが出来るのなら殺しておきたいと考えるのは人の性だ。
昔からそうやって自分達を守って来たし、これからもきっとそうだと思う。

最初に言った通り、俺達は人間と言うよりは妖怪だ。
であるならば、『人間から見た陰陽師』は『絶対的強者』なのではないだろうか。

まだ『妖怪を倒してくれる』というメリットのある今のうちは必要とされるだろう。
だがもし、俺達が掲げる正義を行使し終え妖怪を全て滅した暁には、俺達はただの強者と化すのではないだろうか。

そういう意味でも、妖怪を全て滅しようという考えは間違っていると思わざるを得ない。
今この状況が俺達陰陽師にとってもっとも芳しい状況なのだから。

―――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

さて早朝
俺達陰陽師ズ（俺・ゆら・皐）は現在登校中である。

何日も働き詰めで恐ろしいほどに地球の重力を実感する朝だ。
ああ、学校休みたい。けれども休む訳にはいかない。

勉学と言うものは学校に一日行かないだけで未知の領域に達しているものだ。特に数学と理科はとび抜けてマズイ。
いや、登校して授業を受けても難解未開の理数はわからないのが目に見えてるか。
科学と言うものは、全く以て未開奇怪である。

何が悲しくてそんな意味不明な学問を疲労困憊の中、学びに行かなければならないのだろう・・・・・。

・・・・・いかんいかん。思考がマイナスになっていく。
楽しくなれそうな事でも考えよう

「なあ、夏休みっていつからだっけか？」

そう、夏休み。夏の長期休暇！サマーバケーション！
迫りくる夏休みを指折り数えて待てば、こんな暗い気持ちは吹っ飛ぶに違いない。

「だいたい再来月からじゃない？毎年そんなくらいだし」

思ったよりも遥かに遠かった。
ていうか、今五月じゃん。
ならば、

「ゴールデンウィークっていつからだっけ？」

「もう過ぎた。ああ、そういえば私は今年のは引越しの身支度で潰れたわ」

「あー」

そうだ、そうだった。
突然京へ派遣が決まって、身支度をしてたのがゴールデンウィークだ。
なんで休日の直前にそう言う事するかなあ・・・・。
休日の前だからこそなのかもしれんけど。

「早雲兄はほんまぐーたらやなぁ」

あまりにぐたりとした俺に見かねたといった調子のゆら。
おい、誰のせいでぐたりとしていると思っているんだ。
ああ、黒曜（あいつ）のせいだった。

実のところ街一つ覆う結界を張っていた事より、あの妖怪を滅す際に黒曜の放った必殺技、命名『黒曜砲』の方が遥かに霊力消費が大きかった。
黒曜砲の落ちた先のアスファルトは直系１０ｍほど溶け崩れていたので、どれだけ火力過多だったかよくわかる。
あいつの燃費の悪さには毎度毎度驚かされるぜ。

「ぐーたらじゃねーよ。人一倍怠けたいと思っているだけだ」

これは本音。
けれど悲しかな、現実そうはさせてくれない。
花開院早雲は常に未来を考える。未来、自分が生きていられるように。未来、自分が楽できるように。

今のうちに下準備をしておく。
つまるところ。今俺は楽すべきではなく、未来の俺の為に努力すべきなのだ。
いつか怠け続けられる。そんな日々を目指して。

「なにが違うの？それ」

「これだから違いのわからん奴は困るぜ」

皐の問いに、鼻で笑って返す。
勿論のこと俺自身にも『ぐーたら』と『人一倍怠けたいと思ってること』の違いはわからない。

「・・・・・・っ！」

・・・・修羅を垣間見た。
軽くからかったつもりだったのだが、相当癪に障ったらしい。
俺に向いた皐の瞳は妖を滅するときのそれだった。

そういえばお前には人を苛立たせることに関しては天賦の才を持っているなと竜二が言っていた気がする。
冗談だろうと軽く受け止めていたがここまで来ると認めざるを得ない。
今後、人をからかう時は気をつけねば。

「は、話は変わるがな、今日は生徒会長選挙に向けての会長候補演説があるらしいぞ」

話を逸らす。
きっとこれ以上この話を続けるとロクなことにならない。
と言うか既にロクなことになってない。

「らしいなー。うちの友達も立候補するって言っとったで」

「じゃあ俺も立候補しちゃおうかな。転校数日で生徒会長に登り詰めるとか浪漫だし」

「無理でしょ」

「だわなぁ。こう言うのは時間をかけて根回しするものらしいし。ま、次回に期待しててくれ」

「早雲兄は来年卒業やろ」

◇　◇　◇

ランチライム。
言わば昼放課。

何だこれは。どうなってる。
いや、異変には早朝からばっちり気付いていた。
だが見て見ぬふりをした。自分に気のせいだと言い聞かせた。
しかしこれは間違いなく異変だ。異常だ。緊急事態だ

俺の専売特許が失われた。
要するに――――――妖怪の探知が出来ない。

これは俺の『能力』に誰かが干渉して誤作動させているとみて間違いないだろう。
何の前触れもなく能力が無くなるなんて事は無いだろうし・・・・。

では『誰か』とは誰か。
・・・・考えたくないが十中八九妖怪。それも、”化かすタイプ”の妖怪だ。
そして間違いなく、俺はそいつに狙われている。
俺が陰陽師だからか、それともいち人間を襲うつもりでやっているのか。恐らく前者だろうな。後者なら妖力探知能力を無効にする必要性が無い。

「おい、早雲。午後から生徒会長演説あるから教室移動だぞ」

ぐったりして移動する気の見えない俺にクラスメイトは声をかける。
鍵番だろうか。
幸いこれから体育館へ全校生徒が移動する。今なら逃げ出そうと思えば逃げ出せる。

「ああ、わかった」

机に突っ伏していた体を起こし、立ち上がる。逃げるにしろ、普通に授業をうけるにしろ、ここにいては始まらない。
教室を出、向かうは屋上か。確かあそこにはまだ人払い結界が張りっぱなしになっている筈だ。

――――――――――――――――――――

屋上。
人払い結界は正常に作動していたらしく人気は無い。
階下を見下ろせば体育館へ移動する生徒や先生たちの姿が見える。
この中に俺を狙っている妖怪がいる。どいつかはわからない。
消去法でいけば俺を陰陽師だと知っている存在　となるのだが、俺は公の場で『花開院』と名乗っている。
一般には知れぬ事だが『花開院』は陰陽師の血筋。少し調べればすぐ足がつくだろう。
つまるところ『この眼下にいる全員』は俺が陰陽師だと知っている可能性を十二分に秘めている。

この中に紛れるのは危険か。この人の波ではいつ後ろをとられるかわかったものではない。
生徒会長演説はバックレよう。

「体育館にはいかないの？」

声がする。後ろから。屋上入口のあたりか。
まあ、ここに入る事の出来る『やつ』は限られている。
『妖怪』か『陰陽師』。

「・・・・皐か。それを言うなら、お前もそうだろう」

見ず知らずの一般人であったなら、そいつは妖怪確定で即滅をしてやったものを。
やはり、世の中そこまで上手く出来ていないらしい。
現れたのは、皐。陰陽師だ

「あなたが屋上に行くのが見えたから、ついて来ただけよ」

「なんだお前、俺が好きなのか」

馬鹿にした調子で言い放つ。
そして言った瞬間、後悔した。
腹が立った。今朝の事態から何も学習していない自分に。
これじゃあ犬の方が幾倍も賢いぞ。

「ふふっ、どうかしらね」

俺の冗談を普通に受け流す皐。
何かいい事でもあったのだろうか。
案外気にしてはいないようだ。

「ま、ぼかされても興味は無いがね」

自分で聞いておきながらこの反応はどうなんだか。
正直ブッ飛ばされても文句は言えない気がする。

「つれないわね。もうちょっとガッついてくれてもいいんじゃない？」

・・・・・なんだろう、この違和感は。

「寝言は寝て言えとはまさにこう言う時に使う言葉だな」

「そんなに私魅力ないかしら」

「そうだな。第一お前は、そんなこと言う柄じゃないだろ」

「そう？本当にそう思っているなら、ちょっと傷付くなぁ・・・」

・・・・成程。そう言う事。

「お前か」

「え？」

俺の言葉の意味を理解できなかったのか、困った顔をする皐。

俺は・・・・・その困惑の顔を思い切り殴り飛ばした。

「見事にヒットしたな。やってみるまで確証は得られなかったが、まあこれで間違いない」

「ちょっと！なにするのよ！」

殴り飛ばされた皐は、怒鳴りながら俺に詰め寄る。
いろいろと罪悪感が半端ではないが、もう迷いは無い。

「俺は日本刀を持った事もない素人だが、こんな事は知っている。日本刀ってのはな、威力も然りだが特記すべきはその速さにある。聞いた話だが達人にもなると時速何百キロの剣戟が放てるようになるらしい。そりゃあもう常人の目には何かが通った程度の認識しか出来んだろう。だがな、『陰陽師』ってのはその先に行かなきゃならん。相手が刀の達人の妖怪である可能性もあるからな。時速何百キロの剣戟を見切られなきゃならんのよ。だが、お前は俺の拳を避けられなかった」

「・・・・修行が足りない　とでも言いたいの？」

「いいや、違う。そもそも『花開院皐』は速さを重点において修行をしている筈だぜ？それこそ正面からの俺のノロノロパンチに当たる筈がない」

「油断してただけよ」

「油断？馬鹿言っちゃいけない。人間には『反射』っていう便利機能がついてるんだぜ。人間脅威が『見えて』いれば自然とかわせる

ようになってるんだよ。正面からのストレートを避けられなかった
と言う事はお前は本当に『見えていなかった』んだ」

「・・・・・・・・・・・・。」

「まあ、要するにだ。・・・・・お前は誰だ」

十話　獲らぬ狸は今日牙をむく（後書き）

Ｔｉｐｓ

”化かすタイプ”

代表例としては狐、狸、鼬の妖怪があげられる。

相手に幻覚を見せたり、感覚を狂わせたりする術を得意とする。

また、逆にそう言う術に対しての先天的耐性を持っている。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1773v/

どうも、花開院と申すものです

2011年12月31日01時50分発行